

太 棹

文 樂 研 究 特 輯



第 八 拾 七 號

東 京 太 棹 社 發 行

新時代の

要求

使用簡便な

豫防薬

ゴム製品、薬剤等の缺點を除いた無脂肪沸騰性の錠剤で挿入直に溶解し安全な膿腫と殺菌の重復作用を起しよく花柳病豫防の目的を果します。感覚自然的でありますからゴム製品の比ではありません。粘着なく使用後爽快の理想的豫防薬であります。本剤の使用によつて洗滌の必要なく毒物性の危険薬臭等なく連続御使用するも副作用弊害更ありません。

沸騰性錠剤

薬一錠入 五十錠入
價 二百五十錠入 五百錠入
前金御注文送料本社負担

東京市京橋區銀座二ノ三

新潮製薬株式会社

電話京橋二六四五番
振替東京七〇一〇八番



關西料理

すつぽん椀なら江戸前蒲焼なら
御宴會は大勉強すべて安値に

円六

九段 下組橋
電話九段四〇〇六番

女中は皆藝人揃ひ・太棹の弾き手も揃へて皆様をお待ち致して居ります。

円六獨特のサービス

風流・金ぶら・茶漬

【美地句】

去月屋

新橋二ノ八
電銀二〇八

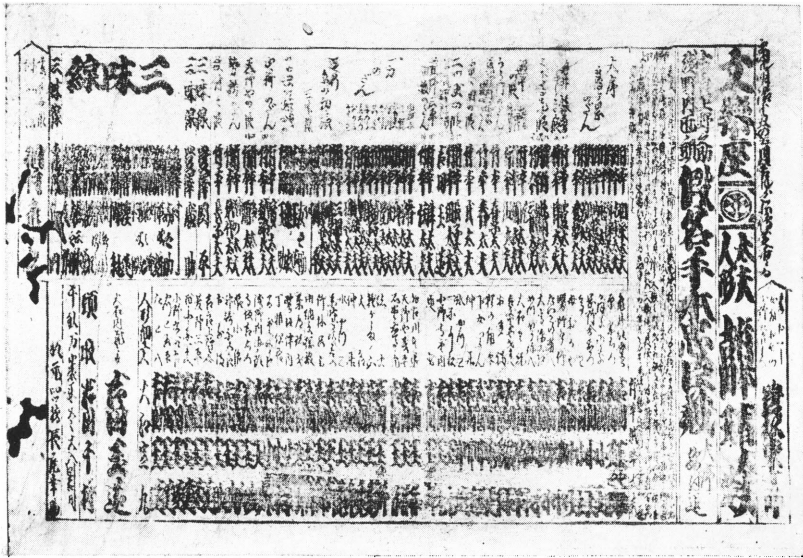
峰高最る依に三榮・靱古
『直師の目段三』るた出演の



一隨の番八十靱古
『正僧辨良の堂月二』



(小泉蛙鳴氏撮影)



忠臣蔵上演に因みて

寫眞は明治十年六月の松島文
樂座で、越路太夫(後擁津大掾)
が、四十二歳の時に初めて九段
目を語つた時の番附でありま
す。

裏門、三人侍、道行を語つて
ゐる春子太夫は、團平の薰陶を
うけた大隅太夫。

三味線三人目の鶴澤清次郎は
現存の鶴澤勝風老です。

— 中澤 巴氏所藏 —

初代 鶴澤清六之塚

初代鶴澤清六の塚が櫻餅で有名な向島の長明寺にあるといふ事が神田の一愛好家松本氏から大阪の清六師の許へ通知があつたので、同師は今回東上を機に此の先人の塚に詣つた。

塚は七回忌に相當する明治十七年五月に建てられたもので、裏書の連名中にある鶴澤きくといふのは初代の愛娘で、先代津太夫に嫁ぎ、今の清六師の養母である。どうした事か、きく女は今の清六師に此塚の話をしなかつたさうで、同師は今まで何も知らずにゐて、今度偶然參詣の出來た事をいたく喜んでゐる。

寫眞は即ちその塚で、表には二代鶴澤清六建、補助和合連、朝日連、語樂連とあり、裏には世相門人竹本播磨太夫、豊竹米太夫、竹本伊勢太夫、同筆太夫、同津太夫（先代）鶴澤鶴右衛門、花澤巴蝶、鶴澤糸風軒（鶴澤徳太郎といふ人にて北海道に没す、徳太郎は今の清六師の前名）稻本マス、鶴澤キク、江間榮三郎の連名がある。

寫眞の如く埋れた塚は清六師に依て早速修繕され、去る廿一日、改めて津太夫師相連れ立て參詣した。なほ二代鶴澤清六の塚は今戸の長昌寺にあります。（寫眞は修繕前の塚にて、向て左より鶴澤清六・同清若・富取芳河士）（本社寫眞部撮影）





太 棹 第八拾七號 文樂研究特輯 目 次

『忠九』不上演問題……………(一)

名残の土佐太夫……………平山 蘆江……………(二)

だがしかし私のプログラム……………田 中 煙 亭……………(六)

忠 臣 藏 雜 感……………齋 藤 拳 三……………(八)

文 樂 樂 屋 圖 譜……………宮 尾 し げ を……………(一〇)

文 樂 座 覺 書……………安 藤 鶴 夫……………(一三)

『忠九』不上演是非……………(一七)

額田六福 白石實三 岡鬼太郎 高安月郊 笹川臨風

徳田秋聲 伊原青々園 長谷川 伸 阿部 豊 小寺融吉

山崎紫紅 宮尾しげを 三宅孤軒 前田曙山 伊藤痴遊

本山荻舟 佐藤惣之助

『忠九』不上演問題に就て……………(二三)

(上演賛成之部) 近江清華 栗原千鶴 桑原美峰 本木大熊 疋田大龍

高野 昇 坂倉素遊 龜田松花 中山美浪 米澤春樂 金子旭六 秋山ゆたか

森 三好 田中遠波 西 玄綠 湯原清司 中島染昇 笠原清芳 大淵しづ江



『忠九』上演賛成芳名

和田金扇 山田壽瓢 柴野筑波 岩木義雀 本城冠之 勝間清勝 三ツ木美登利
 松岡茂里雄 南條南花 鈴木和樂 高瀬 操 黒川 叶 緒方千晴 大石優昇
 中道素鶴 的野關路 寺岡三幸 高橋可遊 巖本善治 根本團壽 田中廣笑
 勝川勝川 小椋長とろ 田幡鐵太郎 小松瓢六 竹内たもつ 細川清 金井辰稻
 堂野前種松 野島貴昇 山本糸樂 岡田 源 中澤 巴 河野國聲 吉田三芳
 伊藤松鶴 長谷川文久 本多可笑 安藤光樂
 (雜之部) 山田三昇 神馬里芳 野中一竹 金田金鳳 保坂有曲 手塚てつか
 松尾武市 松尾 湊 保谷紅司 杉山 要 井上素鳳 橋本三司 小林隅斗
 坂田律子 田口司重 仙臺八雲 玉井松樂 紅雨莊主人 藤田司朝 平野ろ昇
 清水清司

ラヂオ才淨曲漫評

諸 家 (三三)
 金 王 丸 (三五)

太棹社彙報

東都五十義會・京濱素義聯盟創立記念大會・綾秀會・松葉會・聲友會・無名會・東京古鞞會・樂翁氏追善・可悅氏追善・彌國太夫後援義太夫會・音女會・東會・名古屋義太夫座談會・大阪大日本素人淨瑠璃大會・大阪文樂座七月興行

誌 上 舌 三 寸 (四三)
 當 座 帖 (四四)
 編 輯 後 記 芳 河 士 (四四)

表 紙・カッ卜 宮尾しげを
 口 繪 明治十年文樂座忠臣藏番附・二月堂の良辨僧正と三段目の師直・初代鶴澤清六之家

三 絃 界 の 福 音

發明界の大家 寺本善三郎氏 發明

特許 東 さ わ り

如何なる素人にてても『東さわり』は自由自在にさわりを出して、何んとも言へぬ弾心地を感じます。

定 價 一 箇 金 拾 圓

取附料は當方にて負擔致します。

製 造 元

東京市豊島區西巢鴨町

親 託 合 資 會 社

電話大塚二五九一番
振替東京 參五參壹參番

寺本氏は八十一歳の高齡で元氣益々旺盛、十三歳より發明界に天才を發揮して、今日迄三十餘種の特許品があります。目下飛行機の研究中で、燕式と稱し、信州の岩つばめを目標として、どんな強風でもひつくり返らぬといふ。

氏と別懇の巖本善治氏は本社富取主幹と親しい處から同氏は本社にその發賣方を依頼されましたので、本社は取次を引受ける事に致しました。

小石川區音羽一丁目一四

太 棹 社 代 理 部

文樂座反省せよ

『忠九』不上演問題

六月一日より十六日間、一年振りに上京した大阪文樂座人形淨瑠璃總動員一座は、金座明治座に於て華々しく開演、土佐大夫引退披露といふ點もあり、また久振りの古靱太夫を始め、津太夫以下總動員といふ張り切つた上京だけに、近來稀に見る大入満員の盛況を示し、この大成功に機を見るに敏な松竹が、珍しくも四日間の日延べ興行を打つて、しかもこの藝題は「假名手本忠臣藏」を通しと銘打つて、大序より八段目迄上演した。

こゝに今回の東都素義界有志の人々が、この片輪的な演出に驚嘆し、再三文樂座頭取その他に注告を發し、「忠臣藏」上演の上は、是非共致下竹本津太夫をして九段目山科閉居の段を語らせるやうと、「忠臣藏」通し上演としては當然の要求を爲したのであつた。

九段目上演に就いては、今更ら茲に諫々として、その當然なる事をいふ必要はないが、近來「忠臣藏」通しと稱して時々この九段目が上演されず、また上演されたにし

ても、先般の如く土佐太夫に前半を、津太夫に後半をといふ風に、まことに淨瑠璃史上珍とすべき方法を以て勾欄に上るといふやうなわけで、將に充分問題化するべき事を、平氣にやつてゐる文樂座である。

今回の九段目を上演しないといふ事なぞは、文樂座當事者にとつては、寧ろ當然な事である。突然かうして東都素義界有志の人々、殊に文樂座東上には多くの應援をせられてゐる人々の、この九段目上演の注告は、恐らく頭取としては疑耳に水の驚きであつたと思はれる。

これを言葉を改めていへば、文樂座の出し物撰擇なり、太夫の語場決定なり、人形の配役なり、全ての内部的な諸問題は、餘りにも獨斷主義であり、いはば今日の文樂座の支持者を頭から問題にせず、たゞの少しも人形淨瑠璃に對する理解なり、熱情なりを持つてゐない連中が、今日の文樂座のさうした重要な役を受け持つてゐる事が、今度こそはじめて暴露されたのである。いはば既に遅しの感なきにしも非ずだが

この文樂座内部のパチルスをも、今にして改めしめなければ、文樂座は最早救はれる時はない。

一年に一回或は二回の上京ではあるが、藝題の替り目の短時日なる事、各方面からの總見運動等に依り、東京義太夫界は、素玄を問はず、文樂座上京には多くの犠牲と、さまざまの後援を措し兼ねるのである。

何故に多くの犠牲を拂つて迄、さうした應援を措しまぬのか。即ち人形淨瑠璃を愛し、人形淨瑠璃の正しい發展を願ふ心からに他あるまい。

しかるに文樂座當事者は、常に嚴正にして心から人形淨瑠璃を愛する批評家の多くの注意を空吹く風と聞き流し、次第にその藝術は墮落し、遂に今回九段目不上演をその爆發點として、心ある東都素義諸氏の怒りをみる事となつたのである。

本社はこれを當然の事とし、本號は全紙を擧げて文樂座研究特輯號とし、劇文壇の諸大家に、加ふるに東都素義諸氏よりの玉稿を得て人形淨瑠璃の今後への正しき發展を見る爲、涙をのんで覺醒の爲め痛烈なる諸論を掲載した。

即ち人形淨瑠璃を正しく發展保存させるか、廢亡させるかのこの危機に對し、文樂座當事者の正しき反省を促す次第である。



名残の土佐太夫

平 山 蘆 江

九段目が出ないから折角忠臣蔵を出しても、忠臣蔵にならないといふ批難があるさうだ。私はそんな事を少しも感じなかつた。少し思ふところがあつて、去る

四月以來、東京の我家を離れ、武藏飯能に仕事場をつくつて、専ら文筆に専心してゐる私は、只大好きな土佐太夫が引退するといふ問題だけで、あたまは一杯だつた。兎に角、名残りに一度聞いて置きたい。何だつてかまはない。今後聞かれなくなる人の高座に親しんでおきたいと、それだけしか思はなかつた。

だのに、それさへ思ふやうにはならず、漸く十七日の晩、わざ／＼飯能から出かけて明治座へ飛び込み、座の前の大看板

を見てはじめて忠臣蔵が出てゐたのかと思つたくらゐのものだ。こんな心持の聴き手、あるひは見手もあるんだ。九段目が出なければいけないのいけるのといふのは贅澤すぎた話だ。

一體、人形淨瑠璃にしても歌舞伎狂言にしても、あの通り完成された藝術は、どつちの角度から見せ、聞かせしても全幅のよさが察しられ、どの一節を聞き、見しても、全幅の味がにじみ出てゐるのを感じるといふところまで行つてゐるのではないかしら。

假に、今度の興行だつて、二十日間の入場者全部を引くるめて、ある人は只、古靱さんだけを聞きたいといふ人があり、ある人は文五郎さんだけを見たいといふ人もあり。中には帯屋の出る日を、

又は紙治が出たからといひ、どうかすると、さそはれたから仕方なしに來たといふ人もあり、行かなければ自慢にならないなんて人もあるか知れない。

行かうと思つて行かれなかつた人、何も知らないで行かなかつた人にしたつて、所謂玄人筋のいふやうに、やれ九段目が出なければ忠臣蔵でないの、これが出たから是非行つて見やうのと、そんな風な思ひ方はしなくても好いと思ふ。

餘談になるが、歌舞伎座に出てゐる二十四孝だつて、今度は珍らしく菊堀が出てゐるが、あれとても、いつもの謙信やかただけを出すのは原作者に對しても、あの芝居全體から云つても當を得てゐないといへばゐないのだ。

なぜならば、謙信やかたに對して信玄

やかたがある。二つを對比して書上げたところに作者近松半二の趣向があるのだし、信玄謙信の二人物を題材にしたあの芝居の意味があるのだ。而も、長年、その事について誰れもぐづくいふ人はない

繪本太功記にしても、六月一日から十三日までの出来事を一段目二段目とならべた作者の趣向を尊重する上から云つたら、六月十日のくだりだけ引きぬいて太功記と云つたら太十といふやうな始末にしてはいけない筈だ。

一つの劇が醸成する情味を見るのが芝居か、筋を考へるのが芝居か、役者の藝を見るのが芝居か、一場一場の成立ちを見るのが芝居か、など、むづかしい理論を立てたら、興行師は手も足も出なからう。興行師のふところなんぞどうでも好いとして、随分、見物が迷惑する事もあるのではあるまいか。

どこをどうつかまへて見ても、不圖通りかかつて一節をのぞいても、しつとりと舞臺の上に、一抹の氣分が湧き、一味の情が動き、ああ好いなアといふあと味

が心に残る、そこまで行つてゐるのだから、完成された藝術といはれるのではな

いか知ら。

どうしたわけか、淨瑠璃に興味を持つ人に限つて、文樂の太夫に反感、又は惡氣、あるひは輕いさげすみを持ちたがる。誰れそれにナマリがあつていけない、なにがしは調子がはづれるの、あゝ力んではいけない、あゝ浮めてはいけない。曰く何、曰く何と、巧者ぶつた批難——批評ではない——ばかりしたがる。あれは長唄、

常磐津、清元、其他の邦樂愛好者にはない事だ。一口にいへば、義太夫愛好者は大概、小姑娘性を持つてゐる。あの態度を義太夫愛好者が改めない限り、文樂だつて人形だつて立つ瀬も浮ぶ瀬もないのだ

こんな事をいふ私だつて、文樂のやり方や、文樂の太夫三味線人形つかひ全部を甲乙なしに結構だと思つてはゐないが、何をいふにも日本にたつた一つしかない文樂だ。年に何回しか上京しない文樂なのだから、強がち好意を無理に持てとはいはないが、あたまごなしに批難を

せず、堂々たる批評をするといふ雅量を所謂義太夫通の人たちが持つてほしい。

二

入つてまづ目についたのは紋十郎が勸平をつかつてゐた事だ。私はこの人のかひ振が好きだ、何故といふ事は自分にも判らない。どつちかといへば不器用で、小才の利かない藝だが、寸分の隙も見せぬ熱心さと、是れ見よがしの、わざがない、只忠實に勤めてゐるところに末頼もしさがある。その紋十郎がいつもの女形とちがつて立役にまはつた時、一層、生眞面目さを思はせる。こんな人が今に昔の玉藏見たいな人になるのではないかなど、さう思つては見てゐるのだが。

腹切りの前に、二人侍からせりつめられるところになつての不器用さ、そのくせあわてすいぢけず、質實につかつてゐるところなど却つて末頼もしさが何がはれたりした。

筆のついでだが、人形の中にも一人、末頼もしい人がある。喧嘩場で茶坊主を

つかつた紋司といふ青年だ。茶坊主の氣の入れ方は恐らく判官よりも師直しりちよりもよかつたのではないかとさへ思つた。

七八年以前、たしか先代萩の干松だつたかで、その天稟を見つけて以來、文樂の話が出るたびに、あの人はどんな風に藝が進んだかと樂しみにしてゐるくらゐだが、そして時折見るたびに、その上達ぶりが納得出来るので、殊の外うれしいと思つてゐる。

榮三の師直は申分ないが、平右衛門の方は床の太夫があまりによかつたので、つうつかりして人形の方を見ずにしまつた。濟まない事をしたと思ふ。

忠臣藏などいふだしものによると、文五郎ほどの器用な人も、器用さを惜しんで只眞實にしづかに使ひこなしてゆくのが嬉しい。

榮三の由良之助はさすがにどつしりした貫祿だつた。血刀をなめるのは本文通りだが、如何に本文にあつたからと云つて、血をなめる仕草をするのはどうも贅成出来ない。血をなめるほどの心持が納

得出来れば好いのではないかしら。

城明け渡しのところ、歌舞伎でも人形でも常に話題に上る提灯の紋を切りとるしぐさだが、今度、榮三の由良之助がしてゐるしぐさをちつと見てゐて、不圖考へついた事がある。

提灯の紋を切りとる仕草を、一體、誰れがやりはじめたか知らぬが、恐らく、あれをするにはあれをしたために現はれる舞臺効果、それを考へての事だらうと思ふ

由良之助一人残つて城門を見かへる、そこで夜が明けかかる、いつまで立つてもゐられないから立去らうとする、足とはいくらか明るくなつたら提灯にも及ぶまいといふので、灯を消す、消すばかりでなく、もはや提灯そのものが邪魔になつたので提灯ごと捨てやうとしてお家の定紋が目にとまる、だから頂いて切りとつて、あとの提灯を捨て、腕ぐみをしてしほくと立去ると、かういふ順序で出来上つた、定紋切りとりではないかといふのを氣がついた。今度の機會に、かうした性根で段どりをつけた由良之助

を、榮三氏に獨創してもらひたいと思ふ。

一體出雲にしても、半二にしても、對向とか、對立とか、兩たてとかいふ風の相照應した場面をつくり上げるくせがある。たとへば野崎の鶴と舟、妹背山の妹山背山の二親子、前に云つた二十四孝の濡れ衣と簀作、八重垣姫と勝頼、それを信玄やかたと謙信やかたに對立させること、寺子屋では源藏夫婦に松王夫婦、といふ風で、忠臣藏でいへば、三段目の夜あけが勘平夫婦の花やかさ色つぽさに對し、四段目の末は由良之助一人の澁い淋しみを對照させ、判官の腹切りの澁さと行儀のよさに對して勘平腹切りの派手な荒つぽさといふ風に、いつも、對照の妙が考へてある。その點から云つても、城明渡しの提灯のつかひ方は相當考へねば原作者の心が通らないのではあるまいか、況して、四段目のあとに續いて五段目に千崎の提灯で幕があき、與一兵衛の提灯が燃える事によつて次の幕の事件が展開したりするのだが。昔の作者が提灯一つをこんな風に使ひわけて舞臺面に目

の働らきを強くさせた手際には、いつも感心させられるのだ。
いろ／＼書いてみると、肝甚の淨瑠璃の事が書けなくなりさうだ。

三

わたしが聞いた日は鍛太夫のおかる身賣りが最上飛切りの出来だつた。鍛といふ人は得難い人だと思ふ。役者でいへば、仲藏を名乗つてすぐ死んだ勘五郎か、先立つて亡なつた尾上幸藏か、中村鶴藏か、翫助かといふやうな人で、何をやつても巧者だが、何をやつても好いといふわけにはいかない。その代り、ものによつては餘人の眞似られないすばらしいものがある。やはり七八年前、邦樂座で、たしか壺坂だつたかと思ふ。その時もびつくりしたが、今度のおかる身賣りも壓巻の出来だつた。前の時は新左衛門の三味線が七分以上も助けたかと思はれたが、今度は立派に太夫の自力が光つてゐた。

次は古靱のかはり方が著しい、私は一體、古靱といふ人の語り口を嫌ふくせがあつた、旨い人だが、どこかに拵らへて語つてゐるやうなところのある人で、聞いてゐる中に一寸よを見をしたくなつたり、反感が起つたりしたが、近頃は、斷

然そんな事がなくなつた。ぢつと引きつられ、そして、しつとりしたあと味が残る。鍛錬の力なのだらう。

津太夫の四段目は思つたほどでなかつた。といふのは逆のいひ方で、この人の出しものとしてこそ九段目をえらびたかつたのだが、それにもかかはらず四段目が案外しつとりして、九段目を聞いたに近い心持になれたといふのだ。其外には相生の聲の練れて來たことが著しい。

土佐太夫の忠六はめつきり弱つたといふ感じがあつて淋しかつた。語りわけられる人物の中でおかやが格段にすぐれてゐる。尤も、いつぞや聞いた時にも、此人のおかやは忘れられぬ味があつたのだが、おかやといへば、玉七の人形も立派な傑出したおかやであつた。

さて七段目のかけ合ひだが、これは何と云つても一番聞きものであつたらう。津太夫の由良の助が、道がは紋下の貫祿を持つて堂々たるものだつたが、古靱の平右衛門と土佐のおかるとのつめひらき、これこそ豫期以上の出来榮えで、あそこまでゆく和本當に人形が邪魔になるといふ意氣だ。

私がわざ／＼仕事を抛けて、飯能から明治座へ出かけたのは、「おかるは始終せきあげせきあげ——」只それだけの一句

を聞きたいばかりだつたのだ。それだけ聞いておけば今引退する土佐太夫の俤が、永久、私の胸奥に浸みとほるものと思つて、出かけて行つたのだつた。そのお目あての一句が、あゝやつぱりわざわざ聞きに来てよかつたといふ印象を強く残した以上に、古靱の平右衛門と土佐のおかるとの息もつかせぬやりとりがお景物以上の面白さで耳底に刻みつけられたので、私は只々うれしい。これだもの、九段目の出る出ないなどは所詮私にとつて問題でなく、長々と憎まれ口を聞く結果になつたのだ。

もうこれで土佐太夫の引退といふものが、私の終生の思ひ出になるんだ。思へば久しい土佐太夫だつた。たしか明治三十六年だつたか、神田の川竹へその頃伊達太夫と名乗つてゐた土佐さんがかかつた時、私は、折あしく中學の學期試験だつたと思ふ。川竹はゆきだし試験は怖しで迷ひぬいた揚句、落第の覺悟をきはめて川竹の半月を一日も缺かさなかつた。幸ひに落第はしなかつたが、あまり好い成績ではなかつた。併し、よしんばあの時落第をしても私は本望だと思つたらう。それほど好きな土佐太夫も、もう聞かれないと思ふと淋しい。

だがしかし 私のプログラム

田中煙亭

たとへそれが、大入の景氣に附け上つての日延興行にせよ、文樂三巨頭が揃つてゐて、忠臣藏の通し、と銘打つて、九段目を出さないのは怪しからぬ、といふのが、今度の非難であり、問題であるが、無論、尤も至極の非難であり、又た、問題とするのも、當然過ぎた當然であらう。

だがしかし、松竹さんの興行方針は、何でも彼でも、お客さへ來ればよいし、連中さへ拵らへて呉れたら、それでよいのであるから、非難するのが、野暮であり、問題とするのは莫迦氣てゐるのかも知れないのだ。

だがしかし、津太夫は、チャンと九段目の床本を持つて來てゐたといふ話、その紋下が當然過ぎる當然を、仕打の命令

通り、カケ合の山良之助で納まりて、抗議一つ持出せないといふのは、紋下の權威いづこにありや、と言ひたい處です。

人形が無いから、といふ言譯も聞いた、飛行機で取寄せれば間に合ふ、といふ元氣なファンもあつたとの話。又、その津太夫が、此の秋に東上の時、必らず九段目をお聴きに入れます、と言つたとやら、忠臣藏の通しを、初夏から秋へ、連続で聴かせるといふ珍妙不思議な言譯も、後世への話しの種だ。

だがしかし、仕打の方から言へば、イヤ仕打の言譯を想像して見ると、時間の都合、といふのが第一であらうし、前語りの連中に、それ／＼役をつける關係、といふのもあらうし、追出しに道行が賑

やかで好い、といふ建前もあらうし、と數へ立てれば、いろ／＼御尤な理由もあらうといふもの。

だがしかし、あの立て方にした結果が、古靱太夫に、端場にも等しい三段目の喧嘩場などを、早い時間に語らせる事になり、三千以上の組見をこしらへた古靱會の人々を驚かせ、困らせる始末になつたなど、とにかく今度の忠臣藏は失敗であつたことに間違ひはない。

素人考への、私のプログラムによれば、開演時間の二時半を二時に繰上げて、大下馬先の場と五段目の山崎街道をカットすれば、九段目を出す時間を出ると思ふ。そして、本藏松切りを呂太夫に、双傷を大隅太夫に、四段目を古靱に、二ツ玉を新進の源太夫に、身賣りを相生太夫に、勘平切腹を靱太夫に、一方はその儘の三巨頭顔合せとして、八段目の道行を土佐太夫、吉兵衛に頼んで、切りへ紋下の山科、といふ事にする、どうでせう。道行をカケ合にせず土佐老を煩はずといふ破格と、追出しが淋しくて遅くなるといふ

苦情もあらう、それよりも、三味線の紋下、といふ友次郎の出場が無くなつてしまふのは困る、といはれるが、これは私は七段目の全部を友次郎に弾かせれば可いと思ふのである。無論、後の祭りなり、又た圓滿に通過しさうも無い案であらう。

だがしかし、忠臣藏を出して、九段目をオミツトするといふタレ義太式の破

格、墮落を敢てする今日の文樂である。躍起になり、ムキになる方が野暮であり、コケである。唯私は、もう二三年後の文樂がどういふ風に崩れゆき、腐り果てるかど、眼に見えるやうで、ムキになり、躍起になる人々を氣の毒がるよりは、關係當局者の方が、不憫で／＼ならないのである。をはりツ。

ごみに何年通つた事だらう。幸に今年は六月の上京で例年の七月に比すればぐつと樂だ、年に一度の上京を見逃しては後日悔の種である、私は全くいそいそとして變り目ごとに明治座に通つた。

私は二十何年劇場に通つて可成多くの口上に出逢つた、實際芝居の口上は華やかで氣持ちのいいものである、それが文樂の口上はどうだ。

土佐太夫は「五十年の過去をふりかきり、引退後の老後の寂しさを思へば感慨無量」と述懐して居る、「死ぬまで文樂座に止まつて藝道修業を致します」と言ふ津太夫の口上は其にも増して悲惨である。私は全くホロリとした、それでも明治座の六日間は興深かつた、云ひたい事は多い、が締切りの日も近づいてる、それに、造詣の深い研究家の、小泉、安藤兩氏の卓見も多分に出る事と思ふ、で私

一個の所感は、他日「義太夫雑話」にでも折りにふれて書かせて頂く事として富取氏から御下問の「九段目なき忠臣藏に

忠臣藏雜感

齋藤拳 三

今日より二百五十年の昔、貞享二年、大阪に生れた人形淨瑠璃芝居があゝの商業の中心地に存続した奇蹟が此の後永久に續かうとは決して思へない、が然し私ども義太夫を愛し人形を愛する者にはそう思へば思ふ程それが貴く思はれてならない、亦寂しくてならない。

土佐太夫は此の興行限り引退するのである、紋下津太夫は健在でも七十三歳の

高齢である、義太夫の運命を双肩ににたつてる古靱太夫、三味線の總師友次郎は共に病弱休み勝である、一方人形はどうだ、至寶榮三は一昨年病んで以來荒物の重い人形は段々使ふ數が少くなつた。一方の雄文五郎も此度は病んで時々代役である、玉次郎、政龜にしても一年一年衰へが見える、私は此れ等の人を見る爲聽く爲にむし暑い七月の一日を汗くさい人

就て」にうつる。

私は世評とは反對に此の度の出し方に大體賛成である、理由はかうだ。

どうせ九段目が出たにしても古靱に演らせつこは無い、津太夫が語るに違ひない、それなら私は三度も聴いてる、特に一度は善き三味線友次郎で聴いてる。増して、古靱の三、津の四、土佐の六ならめずらしいだけでも結構だ、増して、六段目のよくない津太夫に語らせるとすれば四段目がいい、土佐にしても思臣藏中語り場をさがせば六段目である。

果して聴いた結果は豫期した通りだった。古靱の三段目は見事だった、此の一流の間の正しい、一字一句用意周到な語り口が流石である。

津太夫の四段目は東京では大正十四年十二月演技座の素淨瑠璃で一日語つた以來だ。

花叢上の沈痛、重厚な語り口の古靱には及ばないが、石堂の「近うく」や「無念の涙ハラ／＼」の邊、此の人らしい古

風な語り方で嬉しい、只一二個所間延びな所のあるのと「押項き」など其の一例、それと判官の腹切り聲が無念よりも涙聲に聴へるのは私の耳のせいだらうか、然し何にしても四段目は古靱が傑作である。

土佐太夫の六段目も東京では二度目かと思ふ、他の人の丁寧な所はサラリと演つて郷右衛門の言葉など芝居がかりなのは、土佐式色彩の濃い語り口である。

綴太夫には六段目の口の身賣りが廻つて來た。

此の人の義太夫は、あ、甘い事を云ふなと思つてるとすぐ否な事を云ひだす、藝術至上主義と前受けが入り亂れてる、何にしてもあの堂々たる名調子である。土佐太夫は引退した方が斯道の爲に盡せると、云つて居る、この高弟の爲に「灯を消せばくまなき月の青田かな」が必要であらう、新左衛門の糸は名人團平在世當時にさへ立端場弾きの名手と唄はれて居た、こゝで糸の光るのは當然である。

二段目が大隅太夫に廻つたのも幸だつ

た。一の谷の端場と此の日のが一番此の人の善い素質が聴けた、私は三頭目の次には此の人と駒太夫が好きである、土佐太夫引退後の上京引越し興行には駒太夫、文字太夫の二人を入れる様紙上から希望して置く。

高級裁縫

秋山洋服店

秋山ゆたか

淀橋區淀橋七二一

人形の方は私は反對に疑問な點が多い紙數の都合上個條書にする。

大序

師匠の榮三が代役なのはつまらぬ。

人形通のK氏に聴くと大序へ出ない條件で治めた由、治める人治まる人共によくない。

代役の○○○氏が門造の演つた「早いわ〜」を演らないのは悪い、この型は多爲藏、文三、辰五郎、皆演つたのではなからうか。

二段目

本藏が使に手紙を持たしてやつて幕は面白くない。

原作の「馬引け」がいゝ、歌舞伎では左團次がバラツクの本郷座で演つた。

いゝ幕切れである。

三段目

此場の人形は傑作。

四段目

石堂薬師寺などもつと大時代な扮装はないものかしら。

門外の由良之助の「待ち合せ」は長過ぎはしないかしら。

五段目

定九郎があゝの古風な動きに對して、仲藏考案の黒紋付は、一考を要する。

定九郎が破れ傘で、與市兵衛を追ひかけて来てゆすりになる、どうしてあれを演らないのだらう、前記の本郷座は

左團次、左升で此の通り演つて面白かつた。亦定九郎は四段目の後の評定の場へ出しても面白からう。

六段目

此度の紋十郎は芝居に大分近く演る、これは考へものだ、人形獨特の演り方を研究して望しい、小兵吉の郷右衛門の勘平を打つ方が理論は別として、人形らしい。

七段目

此處の由良之助の動きは實に面白い、平右衛門の差附の裏の赤いのは非常に困る、モミを附ける爲だらうが一考の要がある。

「御手にかゝらば」の件は別に動き方がありはしないかしら。

八段目

此の場の人形は實に面白い。

以上編輯締切を急ぎめちや〜の亂文である、特に人形に關しては、自分の疑問に對し研究家諸彦の御高教を仰ぎたい爲の一文であるのを特に附記して置く。

手紙の好きな土佐太夫

明治座で引退興行をした竹本土佐太夫、思ひ切つて引退はしたものの、さて何かについで心残りと思え、書き置きの好きなこと〜第一回狂言から特意の帯屋でお半の書置を讀み、次の紙治、次の酒屋、次の湊町と、片つぱしから書き置きを讀みつくして、しまひぎわには六段目の勘平で連判状まで見たから、モウ心残りはあるまいと言つたら、イヤ讀むものなら人の手紙でもいゝから讀ましてくれと言つて、二階からのべ鏡で由良さんのヤブレター迄のぞき込んで居たつて。(國聲)

杉山田庭氏より

太棒毎度御惠贈深く御禮申上ます。今春戯作千本櫻完成差上るつもりで、何かと氣無性まだ序幕丈けしか物になりませんところへ、先日下市の壽司屋も焼けたとの報道に刺戟され、早く完結したいと考へてみますが、それからそれと雜用に追はれ、心ならず御無沙汰してゐます

不 惡

文 樂 樂
宮 尾



並木の道具を引つばつてゐるのです。人形の方は一ヶ所をこの間、足踏みをして

引道具

「伊賀越道
中双六一沼
津里の段で
平作がかつ
ぐ荷を重兵
衛がかつ
で歩く場面
がありま
す。淨瑠璃
は「大概亂
れかかつて
居りますわ
い、ハ、と
ハ、ハ、と
の伽する笑
ひ草、踏め
分けてくる
草道」のと
ころで、歩
いてゆく形
として、背
景前の松並
木が下手の
方へ移動し
たします。の
それは圖の
様に舞臺横
じ、網で松

屋 圖 譜 (一廿)

し げ を



三番叟の かけ三味線

開演三十分前に、三番叟の人形が、浅黄幕の前で演ぜられ、ほんの短かい時間ですが、三十分前と云ふので見落す人が大分あります。この人形が遣はれてゐる間、浅黄幕の裏で、俗に云ふ大序の人と云ふ若き三味線弾きの人達が、四五人連れ三味線を奏でます。人形もともに公にされない仕事で、つまらない事ですが、これも修業の一つであります。人形の方は吉田兵次さんが遣つてゐます。足は吉田玉昇さんです。



文樂座覺書

——六月明治座出開帳

安藤鶴夫

第一回藝題（三日・四日）

寺子屋

☆ 古靱太夫、源藏戻りから戸浪との應酬の間の巧さ、抜ける程聴いた語物であり乍ら、今度も亦、私は源藏夫婦の忠義に瘦せる痛ましさを、そして身替りが成功するであらうかどうかといふ不安を、いはゞはじめてこの語物を聴いた時のやうな新しい不安を受けたのである。何時聴いても、古靱太夫のこの前半は不安な気分と、忠義の痛ましさを、宮仕への悲しさをしみじみと感じさせる。

☆ 勿論他の藝でもさうだが、聴き古し、見古した出し物に、常にかうして、はじめて接した時のやうな新鮮な感動を齎すのは、恐ろしい藝の力である。殊に義太

夫節のやうに、常に同じ物を繰り返す古典藝にあつては、この新鮮な感動をこそ最も大切な一點といふべきであらう。

☆ 後半松王の咳のよさ。しかしその後の、「いやいた……」で急に直つて、一つ煽り「されず」が古靱太夫の欠點ではあるまいか。そしてもう一つ、「寺入りの子の母でござんす」が例のウラ聲のやうな調子で、これが空々しく受け取れる。

☆ 「松はつれない」とははじめのつれないは極く微かに、どうせさうさといつたやうな松王の自嘲を表現し、次の「つれない」でたまらない松王のさびしさを出す。こゝが古靱太夫の卓抜した技巧で、その解釋の面白いところである。かうした技巧に、義太夫節の新しい解釋から齎

される、將來への發展性があるのではあるまいか。

☆ そして矢張り古靱太夫は源藏が壓巻の傑作である。普通の太夫がこゝと力を入れる件を、古靱太夫は決してその儘最高頂として扱はない。文五郎の千代が、それ待つてましたとばかりに、大踊りに踊らうといふ「いろは送り」など、全然ウケにいかず、澁くさみしく語るので、文五郎にはお氣の毒だが、同時に低級な觀賞者も亦、文五郎同様肩透しを喰はされる。だが、これが正しいのである。古靱太夫を正しく聴かうとするには、觀賞者も亦修業がいるのだ。

☆ 今度は榮三が源藏を遣つた。戸浪の「なんとよい子」の前で、何氣なく下手

の兒太郎と上手の管秀才とを見較べる。この何氣なくといふ事は、決して客席へ見てくれをしない事である。飽く迄腹藝でうっかりすると見逃す位の仕事で、びたり源藏の大切な仕事をしてゐるのだ。

恰度これといふ對照が「寺入り」の件での文五郎の千代で、この二人を見較べるのに扇を口へ當て、しかも待ち合せて殊更らに千代の仕事を見せてゐる。一方は見逃す位にほんやりと腹でいく藝であり、一方はどうだと客に見せにかゝる。立役と女役との違ひはあつても、この藝の態度はなんとといふ相違であらうか。

合邦住家

☆ 津太夫の「合邦」は後半がよい。恰度前半のいゝ古靱太夫と反對である。合邦が玉手を刺す件の迫力は凄しい位のイキのつみ方である。

☆ たゞあわびの件になつて、合邦が「どうまアそれがむごたらしい」で泣いて氣をかへ、「若役ぢや入平どのとやら」を突然に笑ひ乍らなにか嬉しい事でも頼むかのやうにいふのはをかしい。續いて入

平の詞で「御主人同然の玉手さま、何處へ双が當てられませう」も同様笑つていひ、津太夫自身も笑ひ顔をしていつてゐるが、これは變り目を取り違へた完全な腹構えの誤りである。

☆ 文五郎の玉手、如何に嫉妬の亂行にしても、あゝ迄亂暴に淺香姫を扱つていゝものだらうか。手負ひになつてからも動きすぎるのは相變らずだが、百萬遍になつて「露と消えゆく進めの念佛」で玉手と俊徳丸とが向ひ合ひ、玉手が下から見上げる型も、文五郎だと悪く色氣があつて嫌味になる。所詮は玉手を遣ふ人ではない。榮三か小兵吉で見たいものである。

☆ 榮三郎の入平がはじめ玉手の後を追つてきて、藪に入らずまた下手の小幕へ入るのは、玉手が二の勾欄（かき）へ上つてゐないので、舞臺が狭くこれは仕様がないないとしても、二度目に出てきて藪へ消え、「いつかあわびの片思ひ」の大切な件で出てきて表に伺ふので、ひよつとそつちへ氣が散らされるのは、太夫の藝を消す不屈きさである。今の若さに、しかも將來を

囑望されてゐる榮三郎として、これはまことに遺憾であつた。

帶屋

☆ 毎度といへば毎度だが、土佐太夫は來る度びに同じ語物に違つた苦心の見える人である。儀兵衛の「うけとらぬかへ」等一寸巻き舌のやうにいつて、こゝなど今度のまた變つたところであらう。

☆ かうした世話物になると、土佐太夫は、もう語つてゐるといふより、寧ろ話してゐるといふ藝境にある。半才の蠟燭の引き事など、しみじみと巧い。

第二回藝題（六日）

明石舟別れ

☆ 段切りの所謂舟別れで、玉幸の阿曾次郎が正面切つて立身、扇を開いての見得が、恰でめでたし〜と見えたのは驚いた。あれではでんで別れの悲しい風情がない。要は人形遣の腹構えである。

太十

☆ 文五郎の操が、大踊りをはじめようとする口説きで、古靱太夫が皮肉にもこれをさつぱりとよけて語るので、いろは

送り同様お氣の毒千萬。しかし乍ら「一と筋に」で操が足音を入れるのはいいが、床と少しも合はないのは困つたもの。大夫殺しの足音である。

彌作鎌腹

☆ 津大夫の傑作である。もう少し軽くといふ説もあるらしいが、この物語は鈍重素朴な津大夫のこの風格が最も適切と思はれる。「暮れ六つが鳴つてきた」だの「彌作今は絶體絶命」のイキの凄さ、腹の強さなど素晴らしいものである。

☆ 榮三の彌作、腹切りの件で、綱造の殆ど無關心のやうなめりやすで、永い待ち合せの巧さ、鎌を持つてから突けないで行燈の燈火を吹き消し、仰向いて悶える苦しみも腹に應へた。

第三回藝題（八日）

神崎東下り

☆ これを稱して淨曲劇といふ。

☆ 淨曲家——などといふと、これはいゝと早速「我々淨曲家は」等と用ひられさうだが、この床に現れた淨曲家連の詞の上げ下げ等、恰で歌舞伎のめりはりである。

ある。これでは義太夫節が歌舞伎じみてくるのも無理はあるまい。かういふものを嬉しがつて淨曲家諸先生がやつてゐるのだから、扱て汗をかいてしやつちよこばつての批評も馬鹿々々しくなる。

楠昔噺

☆ 磯拍子では新左衛門の絃と、榮三の小仙、玉次郎の徳太夫に感激した。それにしても、榮三のかうした役を今後も見たいものである。

☆ 切では津大夫の太く低い調子での感傷、「ぢいは山へ柴刈に」「ば、は川へ洗濯に」の憂ひなど胸を打つた。

酒屋

☆ 半兵衛の女房が「なうおやちどんさうぢやないか、さうぢやない」は、今迄土佐大夫が強く抛り出すやうにいつてゐたので、こゝで可成り笑ふ客があつたが、今度はおさへて軽くいつてゐる。こゝい

込みに行く事で、さうした慾が無くなつておればこそ、こゝ迄枯淡に洗ひ抜けたのである。

☆ 文五郎のお園が、隣りの唄を一一氣にしたこと、段切りで當然表の三勝半七に渡してしまふ筈の舞臺を、おつうを抱いて親達に見せて歩くこと、ものゝ二三分を我慢が出来ず「隔ての關」でどんどん奥へ入つてしまふこと等いつに變らぬ勝手放題である。土佐大夫と反對に、この文五郎位、あの歳になつて、舞臺に慾のある藝人も少い。

☆ 女の人形が頭かぶといひ作りといひ大きくなつてきた事も近頃文樂座の悪傾向である。このお園など親達と並んでゐると一番でこゝとして憎體である。かうした事も、人形に魅力を失はさせる一つの重大な點であらう。

安達

☆ 古靱太夫が明治座に祟られて、また調子をやつたが、流石に澁くさみしく格調の正しい一段であつた。

☆ 祭文などさうした聲で苦勞してしつ

とりと語つてゐるのに、ちよいと客席が静かになると、文五郎の袖萩の方遣ひが三味線の調子を直すので、客席がどツとくる。さうかと思ふとまた、榮三の貞任が「心残して」で、階段の降り際に下手の袖萩を見るといふ立派な芝居をしてゐるのに、下手に引込んで袖萩もお君もゐない。不料簡な藝人がゐると、他の正しい藝迄が害はれるのは、實際困つたものである。

第四回藝題（十一日）

扇屋熊谷

☆ これは如何に古靱太夫が品よく語つたにしても、結局作の悪い事が目立つて案外空虚な物語で有難くない。

☆ 紋十郎の敦盛も酷い出来だが、人形だと小萩實は敦盛といふ變化を、全然別の人形に變へてやらなければならぬので、急に小萩がぐいと大きな敦盛の人形に變つたりして、全然面白くない。

沼津

☆ 津太夫の「それ聞いて思ひ切りまし
た」だの「その金銀に換えてのお願ひ」

等のさみしさ、哀しさ。但し今度は「我が子の平三であつたかい」は今迄よりあつさりしてゐてつまらなかつた。

☆ 榮三の重兵衛「面目ないがわしや最前からこなはん」で兩方の袖口に手を入れて合せ、身體を揺すり乍らお米に寄つてゆくその和かみその輕妙さ。玉次郎の平作、文五郎のお米と共に秀逸。

☆ 松原の件で床の上の御簾内みすで、扇を使ひ乍ら客席を見てゐる人間があつた。言語道斷の不料簡者である。

淡路町

☆ 今度の大隅太夫の語り物中での佳作一體今度は絃の寛治郎がさつぱりとした藝風なので、可成り絃とスレるところがあつて、餘り好成績とはいへなかつた。

☆ 忠兵衛の足を遣つた榮三郎の、飛脚屋のトトンがトンは賞讃に價する足拍子であつた。

封切

☆ 土佐太夫はその昔節語りであつたが、結局この段など聴くと詞語りである。忠兵衛が飛び込んでくると急に目の覺め

たやうに面白くなる。が「夕霧文章」でダレさしてはこの段を語れたとはいへまい

新口村

☆ 鍛太夫のやうに、かう被つて陽氣に語つては、絃の新左衛門は一體どう彈いたらいいのか。「腹が立ちますわい腹が」も惡落ちがきた。それに「今ぢやないわア」と引き字するので、間延びがして迫力がなくなる。この人の藝風は、結局一種の自慰である。

☆ 門造の孫右衛門が「行て下され」と金を渡す時、上手の方を向いて梅川の顔を見ずに右手で渡すのは面白かつた。亡き外爲藏の型ださうである。

第五回藝題（十六日）

櫻の宮物狂ひ

☆ 文五郎の渚の方、物狂ひの間の動きは狂女と馬鹿を取り違へてはゐないか。

二月堂

☆ 古靱太夫もこゝではすつかり調子が直つて、例の通り壓倒的な傑作である。この語り物など、恐らく古靱太夫の風格として、永く後世に残るものとならう。

☆ 人形のツメに氣なしがわたのは不愉快であつた。

熊谷陣屋

☆ 津太夫があゝの聲で、相模のよかつた事は感心した。結局聲ではないのだ。

☆ 榮三の熊谷が「心にかゝるは母上の御事」で、見えるか見えないやうに下手後にゐる相模をひよいと見る腹藝。

湊町

☆ これでは結局亡き朝太夫を偲んだ。

人物が同じになる欠點はあつたにしても「遠山嵐」など懐しいものである。

☆ 人形も悪かつたが、土佐太夫はこれが一番落ちた。それにかう立て続けに眞世話物ばかりを並べては、人物も筋も類型的になり、結局鼻についてくる。

☆ 玉幸の清十郎、玉徳の徳次郎など配役の錯誤である。何處の世界に清十郎ともあらう色男が、右手の袖口で顔の汗を拭く色消しがあらう。

第六回藝題(十八日・二十日)

假名手本忠臣藏(大序より八段目迄)

大序

☆ 人形の大序の貧弱さ加減、歌舞伎の大序の嚴肅さは薬にしたくもない。

桃井邸

☆ 力彌が使ひに來たといふ知らせて、紋十郎の小浪は、兩手を袖口に入れて手を叩いて喜ぶのが恰で馬鹿のやうであるそれに本藏が上手へ入るのにてんで見送りもしない。文五郎の戸無瀬は流石に辭儀をしてゐる。

☆ 「忠臣藏」の作劇の巧妙さは、この段で若狭之助が師直を殺さうと決心させる一點でも明瞭である。

大下馬先き

☆ そしてこゝでも亦、改めて作劇の巧妙さと、この段の重要さをしみじみと感じる。即ち伴内がさして入るつもりない

本藏を殿中へ案内する事、これが判官を抱きとめる事となつて、九段目への伏線となり、又おかるが今宵に限つた事はな

いといふ顔世の歌を持つて、たゞ勘平に逢ひたさに出掛けてきて、これが双傷の大切な楔になる事、そして同時に六段目への準備ともなる。かうして院本物のよ

さは、抜きなしに通してこそはじめて全篇の構成の巧さが點頭かれるのである。

殿中双傷

☆ 古靱太夫の師直の品のよさ、あれでこそ筆頭第一の位である。老獪な凄味もあり、「あゝ貞女貞女」なども面白く、榮三の師直が僅に二度中啓で疊を叩いた藝風とびたりイキの合つた素晴らしい出来である。私は今度の文樂座全部を通しての最大傑作だと推賞する。

扇ヶ谷

☆ 津太夫では輕る過ぎて面白くない。

勘平切腹

☆ ちと歌舞伎ちみてはゐるが、土佐太夫の「お身やどうしたものだ」などよくなにより勘平婆アが出色である。

祇園一力

☆ いつもこゝは案外によくないのが、お極りである。

道行旅路の嫁入

☆ 九段目の悲劇を知らずに、この親子の道行は、數多い道行中でも素晴らしい傑作である。

『忠九』不上演是非

— 順不同 —

額田 六 福

非常に楽しみにしてゐたんですが、俗事繁雑を極めて遂に見物出来ませんでした。従つて貴間に御返事する資格の一部を欠いてゐる様です、但し、『通し』と稱しても、今頃では原作全部を演る事は殆どありません。目に角を立て、怒つてみる程の氣がしません。

たゞこの九段目に人形がないと本當の味の出憎い狂言丈けに、惜しかつたと思ひます。

白石 實 三

ほんとうに畫龍の點睛なきものと存じます。

岡 鬼 太 郎

阪地にては攝津、大隅、東京にては綾瀬、生駒の没後、山科の語れる太夫はあ

りません。名人上手を以て自他共に許す人にしても、九段目をと望まれて「まだ存じません」と辭退するのは、決して恥にならぬとさへ昔から言はれてゐる斯道の重い語り物、今の世にその九段目を語る人のあるのが寧ろ怖ろしい事です。

高 安 月 郊

忠臣藏は竹田出雲の作となつてゐるが、實際筆を執つたのは九段目で、四段目は松洛、六段目は千柳である。それに近頃は歌舞伎でも淨瑠璃でも多く茶屋場まで、山科は稀に一段だけ出す様になつたが、外の場を省いてもあの場を出さずば出雲の爲にも、全體の爲にも濟まぬ譯である。筋の上には不合理の點はあるが、それはあれに限らず、節にも見た目にも佳所はあり、初演には一番好評を博した。今でも津太夫、古靱太夫どちらにも相當であるから、今後は前の方を略しても

是非彼所まで出さずば、古典劇同様そんな事から衰への一端になるに違ひない。

笹 川 臨 風

芝居の「忠臣藏」通しにも、九段目を抜かすことが有る様です。これは無論時間の都合からと思はれます、人形芝居は芝居でやらない場も見せてくれるので、大いに發明する所もありますから、既に通しと名乗つた上は上演するのが至當と存じます。然し相當に時間も要します以上、割愛するのも亦已むを得ないかも知れません。

一體文樂の出し物も、文樂の云ひ分は立たないので、松竹で勝手に極めることになつてゐるのは、文樂關係者から常に聞いて居るところです、従つて或場面の抜き差しも恐らく文樂一座の意志ではなくして、松竹の營業方針から出てゐるだらうと思ひます、彦山權現などは文樂座

から屢々出すのですが、松竹は之を取上げず常に、「先代萩」「寺子屋」「紙治」のやうな世間向きのする物ばかり上演させてゐます。既に營業方針とあらば文樂は唯々諾々するより外はありません、九段目抜きも恐らく營業方針から來てゐるのではありますまいか。無論時間關係のあることは争はれませんが、ですから之を以て文樂を責むるのは酷に失するのではありますまいか。

徳田秋聲

貴命の如く、忠臣藏の通しを出す以上、九段目を除くのは無意味だと考へます。私見では九段目を津太夫が語るべきだと思います。一體に東京に於ける最近の出し物は餘り安價すぎて、だれてゐる様です。たとへば「良辨杉」のやうなものもは緞帳芝居の出し物で、ドラマとしては低級なものです。よくあれを出すのは何ういふ譯でせうか。私も津太夫の九段目を聞きたいと思つたのですが、失望しました。尤も津太夫は九段目に限つた事で

ありませんけれど、文樂も人形を持つて來るやうになつてからは、古典的な好い物をやらなくなつてしまつたやうです。

伊原青々園

眞に淨瑠璃を味ふ人からいへば、九段目を抜いたるは眼目を取去りたるも同然と存じ候、しかし一般の客からいへば忠臣藏の通しを演ずる以上は第一に筋の面白みを味ふことに重きを置くべく候、そのために歌舞伎で七段目どまりにすると同じやうにする次第と存候。

尙その上に九段目を加へれば申分なけれど、忠臣藏だけでは一般の客が飽きる故、別のものを演ずるのも興行政策として無理なきか、要するに眞の好き人と一般の客と兩天秤をかけるゆゑ、斯くの如き不都合が生ずるにて候。これは淨瑠璃のみならず歌舞伎も同様に候。何とかしてタマには眞の好き人ばかりのための興行こそ望ましく候。

長谷川伸宅

御手紙拜受致し候へど主人事只今旅行中にて歸京は月末の豫定に候間、締切日まで間に合ひ兼ねる事と存候。

安部豊

忠臣藏を出して日延べをすると聞いた際、九段目を誰が語るであらう、津か土佐か古靱かと一番の樂しみにしてゐたのであります。後に八段目までと知つて非常に力を落しました。近來本格の九段目を聴き得ないので、今度こそはと大いに期待をかけたのであります。殊に忠臣藏通しと銘打つ以上は、是非九段目を出すべきもので、之を除くは恰も強き心臟を取去るのと同じであります。勿論二時間餘もかゝるために締出しに合つたのでせうが、それならあんな詰らない二段目あたりを喰つて了へばよさそうなもの。何としても九段目を出さなかつたことは大失態で、吾等は甚だ不満に絶えないのであります。

小寺融吉

先日失禮しました、又、雑誌を有難う存じました。さて御尋ねの件ですが、九段目のない忠臣藏は首のない忠臣藏と云ふ見方は一應尤もですが、それは云はば古い見方です、今の時世から云へば排斥されなければなりません、そんな事を云つてから義太夫は衰へ、文樂座は政府の補助金が必要になるのですね、歌舞伎では以前から七段目までの忠臣藏をやり、又九段目だけを中幕にやつてゐるではありませんか、これに對して苦情を云ふ人は多少はゐても一般見物は何とも思ひはしません、又、かういふ事も考へられる、現在の津太夫以上の例へば越路太夫のやうな人が、一人なり二人なり三人なりゐれば現在の東京人を前に廻して九段目を入れた忠臣藏がやれるのではないか。越路太夫だけの（實力の事は小生には分らぬが）人氣が津太夫にあれば、津太夫の九段目といふので、それを御目あての客が殺到するのではないでせうか、九段目又キの忠臣藏を出す松竹に對して一部の人から云ひ分があるのなら、松竹

の方でも、云ひ分があるのではないでせうか、然し問題は大多數のお客が、どういふ態度を示すかであります。

山崎 紫 紅

津太夫といふ人が有るのにどうした事かと云へる。古靱あたりにやらせて見たらよかつたと思ふ、紋十郎に勘平を遣はせるより面白かつたらう。土佐太夫に勘平腹切を語らせたのは不服であつた、五回までよいものを聞いたあと、これでもうあの太夫に親しまれないといふ最後に六段目を持つて來られたのは自他共に損の卦ではなかつたか。忠臣藏の通しも二段目あたりは一般は喜んで居ました、とにかく時間の長いことだけが九段目抜きになつた一つの云分けであらう。

宮尾 し げ を

近頃の松竹の立方は何でも首だけあつて足のない、足のあつて首のない芝居を見せるのが特徴です。いつも乍らですが文樂東上といふと野崎、太十、堀川、酒

屋等といふのがお定り、もつとも今度のは土佐の隠退があるので例外とみても満足に聞き見るものがない、私の知人の老人だが、これはこの前聞きましたからと云ふ調子で、此間の明治座へは二度しか聞きに行つてない、即ち立方が營業本位であつて、無い事を示してゐる國性爺の如きものや、二十四孝の通しでも出せばいゝが、國性爺は人形の道具がかゝると云ふから東京では出さないと云ふ、いゝ品物だが金が掛るといふわけである、さういふ品物は、二度替りを、一回にして、第一回、第二回に居据りで見せてもいゝではないかと思ふ。第一回は中程へ、第二回は終りに立てれば、第一回の人は見たくなくば歸るであらう。さういふ意味で、忠臣藏でも、目新しい場面が出たので、九段目が出なくなつたのであらうから、第二回へ九段目以後や、他の物亦垣でも神崎でもつけて出せばよかつたと思ふ。松竹の文樂に對する狂言立方の研究をして貰ひたい事は萬人の聲である事を力説する。

三宅 孤 軒

忠臣藏は「四段目」まで見ただけでそれからお答ひ出来ません。

前田 曙 山

畫龍に點睛を缺いて、盲蛇に墮する事無くんば、通し狂言に九段目を略するも又可なるかと存じ候。由來獨參湯の處方、其主要なる一味を除いて、果して觀面の效果あるや否やを知らず候。

伊藤 痴 遊

御照會の一條は實に論外の沙汰也、僕は一日を費して行く氣にはなれず、中止致し候程也。

從て土佐引退の記念としては、いよいよ以て奇怪千萬の儀と存候

此以上申上る必要なしと存候

本山 荻 舟

好むと好まないとに拘らず、營利興行である以上、時の景氣に引きずられるの

はやむを得ず、殊に興行主たる松竹が、歌舞伎劇によつて擡頭し、現に經營の主要體としてゐる限り、歌舞伎風の狂言立方に接近せしめられることも、また實際問題としてやむを得ないことだと思ふ。勿論松竹のその方針をよろしといふにはあらず、張交ぜ屏風のやうな立方は、歌舞伎の世界ですら、苦々しいことなので、況んや文樂に於てをやといふことになるのは當然だけれど、現在歌舞伎の方でも『忠臣藏』の通しといひながら、九段目の出ないのは當然の如くなつてゐる今日、この弊風を打破するには、文樂が(一)松竹の羈絆を脱するか(二)松竹をリードするほどの勢力を養ふかの外あるまい。私達はもう匙を投げてゐるといつてよい。しかし、どうかして救へるものならば、愛好者並に支持者が、最良の引倒しでなく、先づ眞に自覺して、擁護も鞭撻すると同時に、文樂の當事者自身として、眞に自覺奮勇して、少くとも末節に拘泥する固陋性からは、脱却しなればならない。一例を挙げれば、どんな

大夫でも良心的でさへあれば、歌舞伎の床を勤めても差支へないし、經濟的に惠まれることの薄い人形遣ひは、たとへ流派の異つた演藝の舞臺へも、進んで出るべきだと思ふ。それが自分の藝術を、一般に弘布する所以であり、眞に優れた藝術ならば、自然に斯界全體の勢力を、扶植する機縁にもなるのではないか。一歩でも文樂を離れたら、直ちに退轉するやうな藝術なら、惜くもなければ大した藝術でもない。

佐藤 惣 之 助

御説の如く九段目なき忠臣藏をいかにして通して聽き得べきや、江戸ツ兒は氣が短いから四五段聽かしたらよろしいやろといふ風に仕掛けられては果して愉しみに聽きにゆくは馬鹿者に候これでは如何にも阿呆らうて耳の皮がよぢれ申可候。

『忠九』不上演問題に就て

上演賛成之部 (順不同)

近江清華

今度の文樂座東京は、太夫の三巨頭が顔を揃へ、三味線も殆ど顔が並べられ、人形遣ひと共に總動員での東上である。

然るに、六回目の日延興行に、『忠臣藏』の通しと稱して、大序から八段目迄しか上演せず、眼目の九段目は遂に上演されなかつた。

が、この總動員の顔觸れで、九段目をやれないといふ點が一體何處にあるか。十五日の取引所内に於ける愛好家並に二三稽古場の一般の空氣は酷く悪かつた。

『忠臣藏』の通しと稱し乍ら、しかも紋下津太夫が來てゐ乍ら、九段目を出さぬといふ譯があるか。

これがその時の一般の空氣で、事態を

危しと見た私は、早速その文樂座の當事者に注意したのである。

これより以前、『忠臣藏』が出るだらうと察して、津太夫は『九段目』の本を持參して來てゐたのである。

といふ事は、私に、判然と、津太夫は九段目を語るといつてゐたのである。

そこで私が九段目を出さない事は、東京素義連が相當問題にしてゐるから、是非共出さなくてはなるまいと、文樂座樂屋頭取の新玉に注意したのであつた。

ところが新玉は

「もう番組も出來てしまつたし、廣告も發表してしまつたから……」

といふので、私は廣告が出たからこそ、我々もはじめて九段目のない忠臣藏が出る事を知つたのであつて、なればこそ斯うして注意に來たのである。

すると新玉は

「今更興行を變更する譯にはいかない……」

……

といふ、そこで私は、興行には、いくらでも變更する場合があるではないか、大阪へ電話を掛けて、こちらのさうした空氣を傳へ、相談したらよからうと言つたのである。

すると

「さア、社長がゐるかどうか」と言葉を濁す。最後には、結局、人形がないといふのである。

人形ならすぐ取寄せても、二日間あるのだから充分間に合ふ、間に合はないなら飛行機で取寄せたらよからうと言つても、今度は時間が無いといふことを言ひ出して、何んだかんだと逃げを打つ。

全く以て横着千萬、如何に東京の素義界を馬鹿にしてゐるか、實に言語道斷の不屈なる態度であつて、これは言葉を換えていへば、人形淨瑠璃を馬鹿にし、又文樂座を馬鹿にしてゐる事であつて、た

い切符を賣つて客席さへ埋つてゐればい
といふ、全く單なる興行主の雇はれ者
根性であつて、こんな横着千萬な、人形
淨瑠璃に熱情を持たぬ人間が、文樂座の
樂屋頭取を勤めてゐるのだから、文樂座
の將來は全く危いものである。といふよ
り、既に現在、明日にもかうした人間の
爲に文樂座は本來の藝術的價値を失ふ事
に立ち至るであらう。

實際、時間がないならば、くだらぬ二
段目やなにかは省略して、當然九段目は
つけるべきである。また時間を一時開演
としてやつてもよからう。現に今迄の五
回より開演時間を一時間繰り上げて二時
半開演としてゐる點から言つても、九段
目を上演する爲には、二時位に開演する
事も一つの案である。

これでは全く首無しの忠臣藏である。
手や足や胴はあつても、大切な首が無け
れば血は通はないのだ。

我々は實際のところ、松竹とは何んの
縁引もないし、又どの太夫を最負にして
切符を幾百枚と、あつちこつちからと重

復しても買つてやる必要はないのだが、
つまりさうしてゐる事は結局、淨瑠璃界
の發展を思ふからに他ならぬのである。
實際、何んの由縁もない太夫に贈物を
するの、それは少しでも賑々しく飾つ
てやつて、その太夫にのみ贈るといふの
ではなく、淨瑠璃界を華々しく飾りたい
心からなのである。

九段目を語るといつて本迄持つて來て
ゐる紋下の顔もつづし、又是非共語で欲
しいと要求する東京素義界（或は全部と
は思はず）をも無視して、以上のやうな
實に根據のない理由を理由として、九段
目を上演しないと一體何んたる事であ
らうか。

松竹に反省を促すと共に、實際、誰の
爲にあの満員を續けたかは、改めて樂屋
の當事者に質問したいと思ふ。

▼ 栗原千鶴

實際東京素義界を踏みつけてゐる。

今度文樂が來る時は、今から思ひやら
れるといふものだ。恐らく素義界には切

符は賣れまい。

今度なんか、九段目がないならといつ
て、一度買つた切符を返した人が大勢あ
つた位だ。

▼ 桑原美峰

一體義太夫の衰微するのは、義太夫に
眞味がないからだと思ふ。

例へば先代萩なら政岡の年配、鶴喜代、
千松の聲柄、凡てを充分研究して、客に
解り易く、面白く、しつかりとひきつけ
るやうにしなければならぬ。

百人の聽衆の中に、義太夫を知つてゐ
る人は十五人か二十人位のものであらう
と思ふ。

知らない人には、矢張り解り易くしな
ければならない。
その意味に於ても、九段目は必要であ
る。

三段目を古靱に語らせなくとも、七段
目を巨頭連の掛合にしなくとも、それは
若い者に譲つて、時間が無いなら、前の
不必要なところを無闇に羅列しなくと

も、それらを抜いて、九段目をつけて欲しいものだ。

▼ 本木大熊

素人にして適當なる言葉を知りませんが、松竹が關東人を見損つては聞逃せな

▼ 疋田大龍

若狭之助の思情厚き識見及び本藏の苦忠並に純愛等の名作の意義徹底ならしめるべく絶對上演すべし。

▼ 高野昇

折角の御料理に焼魚のないのはものたりぬ。

▼ 坂倉素遊

最も大切の忠九を抜いた事は誠に文樂の將來の爲め遺憾に存じ候。

▼ 龜田松花

私も九段目を期待いたして居りましたのに誠に残念に存じました、まして三味線は一日の中此一段の中にあつてある

と師匠より何がつて居りますので。

▼ 中山美浪

忠臣藏通しと云ふに九段目を抜くと云ふ事は恰も人形に首の無いのも同じで、餘り馬鹿々々しさに一回より五回迄は行きしが、六回目には取止めになりました、何の爲に九段目を出さぬのか判談にくるしむ。

▼ 米澤春樂

先般のドレー機飛行家の様に、松竹營業政策と云ふ悪天候の爲に、〇〇搭乗者連中には實に氣の毒愛好者又同じ。

▼ 金子旭六

無論九段目上演賛成仕候貴社の御奮闘を謝します。

▼ 秋山ゆたか

九段目上演賛成、御社の御意志に大賛成です。

▼ 森三好

九段目のない忠臣藏に就ては文樂の大失敗なり、素人なれば兎に角、我國一流

根本の義太夫先祖であり乍ら、此九段目を抜くと云ふ事は、素人會と同じ様に思へる。抑々忠臣藏にては、九段目が一番

聽客の所望なり、夫に何ぞや、忠臣藏全通しの看板廣告を出し乍ら、上演なきは何故の理由なりや、九段目上演は一人吾のみならず愛義家諸氏は皆絶對賛成なり、依て所感を述べたり。

▼ 田中遠波

仰せ御尤もに存候。

▼ 西玄綠

梅席の聲「なぜ九段目が出ない」九段目上演賛成大賛成。

▼ 湯原清司

勿論九段目上演賛成に御座候。

▼ 中島染昇

九段目のない忠臣藏に就ては、好義家に取り誠に残念に御座候。

▼ 笠原清芳

と思ひます。

時間や役者の關係で折角の丸本物も各所の節約が有りますが、文樂丈でやうやく忠實な物が見られ聞されるのです。又芝居に出ぬ端場物も聞かれ、私等同好者には一番樂みなのです、九段目等も芝居では仲々出ません、津太夫の九段目は各人の期待せし事は申迄も有りません、素義の人にも九段目を語る人は少なく、私は先に殿母太夫のを聞いたと思ひます、今回は非にと思ひ見物致しましたが、とうとう出ませんで失望した一人で、今後は九段目上演を賛成致します。

九段目上演至當。

▼ 山田壽瓢

▼ 柴野筑波

此度文樂座六の替りに忠臣藏通しと承り、何をおいてもと駆つけ候處、誠に御申越の通り九段目上演無之小生に於ても甚だ不服に存じ候。四段目は津太夫師より古鞆師にお願ひ致し、九段目こそ津太夫師の熱演を拜聽出来るものと樂みに致し居候處實にがっかり仕候。尙七段目の由良之助は上出来にて誠に嬉しく存じ候

▼ 本城冠之

私は今回の文樂は家庭に不幸の爲め行きませんでした、友人より聞き及居候素義會なればいざ知らず、本場の太夫を連ねながら九段目を抜くは道理に合はず松竹に反省を願ふ者です。

▼ 勝間清勝

今度の忠臣藏は九段目なきは全通しにあらす出し物偽なり。

▼ 三ツ木美登利

忠臣藏を聽に行くとするれば、四段目六段目殊に九段目に至りては最も重きを置いて聽きに行くのです、九段目のない忠臣藏は目玉の無い鯛のうしほの様な感じが致します。

▼ 大淵靜江

あるべき物が無いのは變ですから、ある方がよいと思ひます。

▼ 岩木義雀

▼ 和田金扇

今回九段目上演なきは各方面の非難甚だしく、今に初めぬ松竹の横暴なる營業策は、凡ての演藝を低下に導くの一原因

▼ 松岡茂里雄

小生忠臣藏拜聽せず従て如何であつたか存じませんが、何れにしてもアノ時間で通しを語り盡せる筈はありません、結局

頭からやれるだけやるかヌキ／＼やるかの二途何れによるかでせう、人形芝居と言ふ事が主になれば時間のある限り頭からやつて見たいと言ふ事は當然でせう、然し九段目のない忠臣蔵が物足りない感じのすることは識者をまつて始めて知ることでもありませんまい。

▼ 南 條 南 花

九段目上演の可否は論ずる迄もありません、然し一部の愛好と一般の興行価値とは兩立しない事がありますが、今回の如きは三を大隅、四を古靱、六を土佐、九を津としてどうして興行価値を損するのでせう、開演時間三十分も繰上げれば時間の問題などどうでもなる筈です、九段目上演の理由がわかりません、津太夫師に對する同情は此前から土佐師と半段づゝ語らせられた時からお氣の毒と存じて居りました。人形淨瑠璃の如き特殊の豫備知識を要するものは、なるべく津太夫師始め大家の意見を尊重していただき度く思ひます。

▼ 鈴 木 和 樂

だいたいろ／＼な問題が起きてゐるらしいが、本来ならば九段目は出すべきが至當に思ひます。

なにしろ、興行政策といふものに、いつも／＼あゝいふ立方をするのですから、眞面目に文樂座の事を考へてゐる人々が、怒るのは當り前の事だせう。

▼ 高 瀬 操

何分にも營業政策といふ事が第一になつてゐるらしいのですから、その點は相當興行主は横暴であるといふ事になります。

太夫の意見が通らぬとは、全く紋下以下の人々にとつても、實にお氣の毒といふべきです。

これを動機にして、いろいろの意味から、素義の大團體が出来るなれば、全くいゝ事と大いに賛成してをきます。

▼ 黒 川 叶

私は如何なる事かわかりませんが、九

段目は實に期待して居ましたのが出ない爲に、丸でお魚の骨抜きの様で残念でした。

▼ 緒 方 千 晴

どうして九段目を出さなかつたのであらうか。

大事な九段目を出さぬでは、まるで我々にとつては聞き應へがない。

一時からはじめても、必ず九段目を出すべき事だ。

▼ 大 石 優 昇

今回の様な事が以前にも時々ありました。追出しを派手にそして小細工過ぎる位ひの所作に依つて素人の方々に迎合する即ち、人形を主とした營業政策の結果と思ひますが、我々ファンは太夫を主に對者として、つまり「文樂を聞に行く」のですから、此のやりかたは不賛成です。私案として、時間の繰合せをして、九段目を上演し眞に斯道を愛する者は、津太夫さんの熱演を心ゆくまで聞えますし、然らざる者は自由な行動を取ればよいので

ありますが、何にしても今回のやり方は、都下十萬の同好者の期待を大に裏切るものでした。

▼ 中道素鶴

「忠臣蔵」で九段目のない通しといふものは絶対にありません。

これは當然紋下の語る語物である事を、今更らふ必要はありません。

▼ 的野關路

一體現在の文樂座といふものに僕は多大の疑問を持つ。

九段目のない忠臣蔵を出す等は言語道斷といふべきで、第一紋下がこの重い語物を出さずして、四段目位を語つたり、

さうかと思ふと身體の直ぐ悪くなるやうな太夫があるんだから、文樂座などといつても實際行く氣にはなれない。

恐らくいふ人、いはぬ人はあつても皆同感に違ひあるまい。

▼ 寺岡三幸

九段目は當然あるものと、大變期待してゐたのだが、その楽しみも、また裏切られた。

實際、文樂座の現状、殊にその興行制策は情けない事です。

▼ 高橋可遊

恐らく興行主としては、上演時間が無いといふ事を理由にするだらうが、出来る事なら、九段目は上演しなければなりません。

▼ 巖本善治

九段目上演賛成仕候何卒御刺激被下度候。

▼ 根本團壽

此の問題に就ては種々不平の談話を素義の元老の方々よりも承り誠に文樂座將來の爲め遺憾の事と思ひ居る者の一人に有之候。

▼ 田中廣笑

九段目こそ最高權位たる文樂に是非此

際の上演をそひ、我々素義の参考とすべき物と考へ申候。津太夫師の御苦勞を特に希望仕り候。

▼ 勝川勝川

御文面の趣き最も同感の次第に御座候

▼ 小莖長とろ

本月明治座に於ける大阪文樂座六の替り忠臣蔵通し上演と云ひながら、九段目のぬけて居る事に失望且つ憤慨した一人です、人形及び場面の興不興は別問題として、續いて居るものを切つて上演する事は首を手を若しくは足を取られた不具の感がありました。

▼ 田幡鐵太郎

九段目のない忠臣蔵は總大將の由良之助のなきと同じ事也、九段目に於て由良之助の智囊並に然耐の偉大なる心境をこゝに現はすものなり。

▼ 小松六

御説の通り同感松竹の反省を希望す。

▼ 竹内 たもつ

忠臣藏の通しといつてゐる以上は、九段目は必ずあるべきものだと思つてゐます。

▼ 細川 清

恰度、明治座の文樂が忠臣藏をやつてゐる時は、飛行機に乗つてゐたので、残念乍ら聴かれなかつたが、しかし乍ら「忠臣藏」の通しを出すといつて、しかも日延べ迄もしてゐ乍ら、九段目を出さぬといふ事は、偽りといへば偽りのやうだが、時間やいろ／＼の都合もある事だらうし、皆さんのこの問題の話を聴くと、なか／＼趣味者としては御尤の事のやうに思ひました。

▼ 金井 辰 稻

文樂の義太夫として、忠臣藏に九段目が出ないのは物足りない感じが致しません。

▼ 堂野 前種 松

國家が保護を加へし古典藝術、特に世

界的名聲を博せし我が國武士道の眞髓を發揮せる忠臣藏上演に際し、九段目を抜くは恰も龍を繪て其眼を抹殺せるに似たり、若し松竹が營利本位に立脚して此暴舉に出でたるものならば、國家に對し將た東都素義界に對し何の申譯がある、貴社鼓を鳴らして其非を責めて可なり。

▼ 野島 貴 昇

御照會の件全く同感にて小生も既に不平を漏したる處。第一三段目を古靱に配せしは無意義と存じ候、其他上演せし二ヶ所は不必要の處有之候。尙今回位各太夫共熟なかりし基因何處にあるや、惟ふに將來文樂の爲め轉寂莫の感深しと存じ候。

▼ 山本 糸 樂

結局は資本家から見た興業價值の問題で、私の淨曲音讀論にても記載した様に、寧ろ如何なる金權に對しても敢然として不屈の絶對信念を以て藝道に生きる太夫の無い時を残念に思ふ「九段目の雪轉か

ら十段目」

▼ 岡 田 源

九段目を上演して頂く事は勿論賛成ですが、本月の明治座六ノ替りに上演せざる事を以て東都素義界の面目を蹂躪したるものとも思へませぬ。松竹が營業政策のみに走る事は同好者として甚だ遺憾ですが、營利會社の事業としては或程度まで止むを得ぬと思ひます。寧ろ營業政策の拙劣なる場合もありて義太夫に對する認識不足に非ずやと思はるゝ事もありません。松竹に反省を促し度は其點であつて、營業政策を捨て、(即ち損をしてまでも)興行せよと云ふのは酷です。午後二時半から開演しても忠臣藏の通し狂言では九段目までやれませぬ、然し本氣でやる氣ならば正午からでも初めるとか、芝居でやる様にぬき／＼でやればやれぬ事はありませぬが、最終を九段目までとしては太夫に氣の毒です、津太夫の九段目が呼び物であつても、現今の大衆では午後九時半から後十一時までの九段目には大多

數歸つてしまひます、攝津大掾、越路太夫でも其當時の文樂座の狭い小屋ならば

(而して聽手が理解あるファンが大多數ですから) 謹聽しようが、現在で明治座で其最終のハネ時間では如何でしょうか、極小數の眞の義太夫同好者のみが聽くのでは、太夫も張合が無いでしょう、津太夫の九段目は當代では随一と思ひますから、寧ろ忠臣藏の通しで無い時に中幕物として出して頂き度いと思ひます。

▼ 中 澤 巴

忠臣藏の通しで九段目を出さぬのは、恰度人間を作つて魂を入れぬのもおなじ事である。

忠臣藏に於ける九段目は、將に人間の心臓である。

しかし、興行は興行であつて、九段目を出したから客が來るとか、又出さないから客が來ないとかといふものでもない。殊に時間の都合もあらうけれど、その道の趣味者にはいろいろの批判があつて

も、客の呼べる時もあるし、趣味者に好評のものでも、又客の來ない時もあらう。

そして太夫も三味線も人形遣ひも、松竹といふ會社の所謂サラリーマンであるから、社長のいふ事に背かれぬであらうが、だが古典藝術を代表する文樂が、忠臣藏の通しを出す以上、趣味者としては是非共九段目を出して欲しいと要求するのは當り前の事である。

太夫は例へサラリーマンではあつても、興行者が出さぬといつたところで、藝術家としての立場から、何處迄も自己

の藝術的精神に立脚して欲しいと思ふ。勿論、松切りや進物場などは、文樂でなくでは見られぬといふところもあらうが、忠臣藏に九段目上演を要求するのは當然過ぎる話といふべきであらう。

時代は違ふが、明治の末期迄は大序から義士引揚まで上演し、その中で九段目一段を以て、一日の客に満足を與へた時代もある。それを思ひば感慨無量に堪えない、これは私の古い頭かも知れぬ。

▼ 河 野 國 聲

文樂座の日延興行が決定され、出し物は忠臣藏の通しだと云ふので、東京の素義連は古靱の四段目、土佐の六段目、津の九段目を期待して皆一様に待ちかまへて居た。

處が刷り物を見ると肝心の九段目が無いといふので失望したり奮慨したりして、首なしの人形なぞ見に行くものかと、各方面での批難は相當高くなつて來た、折柄五十義會の會期前とて素義連は寄り／＼話し合ふ機會も多かつたので、この問題は意外の強硬さとなつて、アツチの部屋コツチの連中で今尙引續き問題になつて居る、(廿日)

これより先自分は人も知る様な古靱崇拜者だから彼の番組發表の頃古靱師に四段目か九段目でも伺ひ度かつたが三段目では意外ですネ然し荷が輕くて體はお樂が出來るといふものですねと話して居つたし、丁度其頃津太夫最負の近江さんは又津太夫師に「今度は早く役濟みになる

からユツクリ飯でも食べに行かうかネ」と言つて居た様な澤合ひだつたそうな。

自分もそうだが近江さんにしても大の文樂座びるきだから九段目の出ないのには残念を感じ乍らも、決して個人的立場としては怒つたり膨れたりしては居らなかつたのだが、各方面の情報を聴くとどうも九段目が出ないので人氣が悪いとの事なので、近江さんは早速六の替りの開演前に其事を好意的に注意したのでそう

だ、然るに松竹の方ではそんな事にはおさまひなしに、豫定の通りで開けてしまつた、處が案の定かどうかは知らぬが十七日はガタ落ちの不入りで、十八日も上成績とは言はれず十九、廿日の兩日は土曜日曜なので相當な入りは有つたが、素義の定連の姿は殆んど見えなかつた。

素義連の云ひ分はこうだ、忠臣藏の通し狂言と銘打つてしかも紋下以下全員引越の顔揃ひで九段目を出さぬとは第一東京人を馬鹿にして居る、時間が無ければ二段目を抜けばいいではないか、しかも發表前に於て素義界の空氣も通じて注意

し、其旨を紋下からも松竹へ申入れたそうなのに、知らん顔で押通したのは明かに東京の素義界を無視し、又營利一點張りで技藝員の立場も藝術の法則も省みぬ會社側の横暴だといふのである。

この問題は只單なる九段目を出さぬの形式的問題のみに止まらず、數千人の東京の素義の存在を無視した問題だといふので、意外な暗流が渦を起さんとして居る。

先日某所に於ける素義有力者の會合は、先づ素義の團結を強固にし一切を解決せんと種々協議が重ねられた、或ひは斯様な問題が動機となつて、三千素義の團結が出来斯道を鞭鞭振興させる事が出来る様になれば、禍福轉換もつけの幸である。怒り初めた連中はウント怒つて會社をとつちめてやるべしである。

會社たるものも營利一點張りとの批難に鑑み（或は儲からぬので困るかも知れないが）勞資協調で、更にお客大事と素義連とも連繫を保つて、文樂を榮へさせ行く事に努力して貰ひ度い。

今怒つて居る素義連は皆東京つ子だ、會社の出様次第では、モツトく應援するに決まつて居る喧嘩腰の向ふ鉢巻は、御興をかつく向ふ鉢巻と同じ事だといふ事を附言して忠告する次第である。

▼ 吉田 三 芳

一般の素人に解りやすく、又受けるやうにと出し物を立てる松竹では、營業方針として、さうした事はかりを考へるのも、無理からぬ事と思ふが、我々素義の方からはせると、開演時間を早めても九段目は是非共出して欲しいと思ひました。

▼ 伊 藤 松 鶴

この頃は斯界に餘り顔を出してゐませんから、苦情をいふ時ばかり飛び出すといふのも變なものだが、然し義太夫の愛好者として、九段目の出ない事はどうかといふと、「忠臣藏」のタテを出すなら當然九段目はつけて貰ひ度かつたのです。

▼ 長 谷 川 文 久

折角文樂が來て、大變景氣もよく喜んでゐた。忠臣藏の通しが出るといふので勿論九段目も出る事と楽しんでゐた處が出なかつた。しかも、素義の方で九段目を出すやう勸告した人があつたさうだが、それにも拘らず出さずにしまつた。

元來、現代の興行は役者でも太夫でも、自分の力では客は呼べぬ、みんな前賣をしてゐるのではないか、つまり客が客を呼ぶといふもので、その客の注文を無視するといふ事はよくない。昔は役者でも太夫でも自分の腕と力で切符は賣れたものだが、今は義理切符である。

私は土佐太夫の引退に因んで、初代歌麿の帯屋の軸に掛けて、香を焚いて引退の土佐太夫に敬意を表してゐるが、これは土佐太夫が音女會にその名を出してゐるからで、要するに義太夫に敬心を持つ私は文樂が來れば終始その人氣にも注意をして見てゐる、然るに素義の注文を松竹は何故に容れなかつたか。

▼ 本 多 可 笑

拜啓過日御問合せ有之候大阪文樂義太夫忠臣藏通し狂言に對し九段目上演の可否につき小生はほんの素人にて何等批評の力無之候へ共、一般的より考ふも、九段目の上演が當を得たる者に非ずやと思ひ居候、九段目は忠臣藏の内に於る最大衆の希望に添へる筋書に候へば此際大衆娛樂の點よりも是非上演方希望仕候。

▼ 安 藤 光 樂

皆さんが憤慨されて居る明治座の文樂一座の忠臣藏通し狂言の事ですか。

今回の様に初日から千秋樂迄少しの弛みもなく満員を續けた破天荒な盛況は、目下の義太夫界稠落のドン底のものがきから來た更生とは無論思はれませんネ。土佐太夫君の隠居披露の同情も含まれて居ませうが、矢張り何と言つても東京に多大の文樂ファンが存在は、偉大なる力であることは忘れてはならないでせう。其文樂黨なるものゝ過半は東京幾萬の素義界に頼られて居る事は、文樂の諸氏は首肯されて居るものと思はれます。

然るに六の替り興行の時、兜會の幹部

から一般素義の希望でもあるから、出來る事なら忠臣藏の通にして紋下津太夫君に九段目を語て貰ひたいと云ふ熱望を松竹へ提出したさうですが、當面の津太夫君が賛成して居たので、無論希望條件が容れられ、九段目が組込まれるものと期待されて居たらしかつたですネ。

處が松竹に一蹴された兜會としては嘸かし腹を立てた事と思ひます、一般素義への面目上激怒されるのも無理ありません。

一團體兜會の爲め、松竹の營業政策を左右する事は出來得べき事ではありませんまいが、今日文樂對東都素義といふ關係は、昔日の如く輕々敷所理するといふ事は、實際松竹の認識不足と云ふものでせう。將來年中行事とする年二期の文樂東京興行に暗い影をさす事がなければよいと思ひます。

附記 鈴木松實、星野桔梗の兩氏も御執筆下さる事になつておりましたが、とうとう間に合はず残念でした。次にお應ひ下さいました九段目上演賛成者の中に、

某大家といふのがありましたが、普通投書などは違ふ今回の問題に就ては、堂々と御著名ありたいものです、それにしても、住所氏名なき爲めこれは没書に致しました。外に御著名御失念の方が六七名ありました、皆賛成の方々でありましたが、残念乍ら記載を得ませんでした。

(記者)

雑之部

▼ 山田三昇

御通知に接し候得共只今主人旅行中に有之候に付悪からず御諒承下され度先づは御通知まで。

▼ 神馬里芳

御葉書頂きました忠臣藏の一段目から九段目まで通しの芝居はまだ見た事がありません故、出来ないものと思つて問題に致して居りませんでした、九段目の芝居は外では大抵中幕で見えて居りました。

▼ 野中一竹

拙者何共成否申上る事は不出來申候に付左様御了承下され度。

▼ 金田金鳳

語るものと語らせられるものと立場の相違なり、演るも演らぬも素義にとつて何等拘はりなし、別に意見なし。

▼ 保坂有曲

松竹が營業政策に汲々して居る事は今更憤慨しても始まらない、相手にするだけ馬鹿々々しい、午後三時より十一時迄眞面目に聴聞する聴衆は何人あるか數へる程と思ふ、従つて大序から九段目迄やつても始めを割愛するか終りを捨てるかせねば頭が痛くなる。其の意味で七段目迄とする事は人助けの爲と思ふ。況や津太夫の山科なれば筆者は上演されても割愛する、越路再來なれば聴聞する。

▼ 手塚てつか

兩記の事は私共にはわかりかねますから皆様方にて、御取はからへ下さい。

▼ 松尾武市 同 湊

上演なきは甚だ不本意なれども、時間の關係上致し方なき事と諦め居候。

▼ 保谷紅司 杉山 要

九段目を語る素義の一部の者の言ふ事で、松竹の興行政策に依り素義の關知する所にあらず。

▼ 井上素鳳

期待に反したのは御同様遺憾に堪えませんが、東都素義界の面目に關する問題として松竹に反省を促すと言ふ事は如何なものでせうか、通し狂言として歌舞伎などでも減多に出ぬ桃井館を演じたのは結構な事と存じますので、結局時間の關係で上演出來なかつたのではないで、せうか。

▼ 橋本三司

時間の不足より不得止もの?、興行政策より不得止もの?此點考慮の結果無く共可ならん、忠臣藏通しとすれば必要。

▼ 小林 隅 斗

何んとも批判申兼ね候。

▼ 坂 田 律 子

皆様の御高悦を樂みに待ち居候。

▼ 田 口 司 重

そんなに重大な問題とも考へませぬ、お芝居の約束から閉場幕を賑かにする必要からとも思はれます。

觀衆の大部分は見る文樂が目的だつたのではないでせうか、私も文樂の忠臣藏は始めて見た、素義の主張云々もどの範圍の方々か不明で連中切符賣付に奔走したにも不拘松竹が意見を用ひぬと言ふ様なものではないのですか。

▼ 仙 臺 八 雲

營業政策を除外しても忠九を入れる事は無理でせう。勿論前の方の端場を省略すれば一時間半の忠九を入れる事は何でもありませんが、演題の組合せが道行のアウトになつて居ますから、道行の前へ忠九を入れる事は通し物として意味をなさ

ず、左り逆道行のアウトへ入れれば、客は半減し、道行の終りから、忠九を半分位聞いた丈で歸るでせう。打入や天川屋をアウトへ付けない以上、津太夫を追出しに使ふのは可愛いさうです。尤も入場料は既に取つてあるから、お客が忠九を聞かずに歸つても影響はありませんが、兎に角忠九をアウトへ入れれば大衆向とならぬからです。忠九を出すなら四段目位から始めて忠九までやり、アウト賑やかなものを出すべきでせう。

▼ 玉 井 松 樂

拙者儀只今素義界より休演仕候有様にしてお尋ねの件御返事致し兼ね右御諒承披露下度願上候。

▼ 紅 雨 莊 主 人

九段目の無い忠臣藏は尻ぼの無い狐みたいで番組として形の付かぬは申迄もなし、従つて事前ならば問題とならんも、事後となつては例へばあれに九段目がついたら誰が語ります？大隅の喧嘩場、古靱の四段目、土佐の六段目、津の九段目

となると三越の食堂のやうに食はぬさきから味が分つてゐる、不幸にして九段目を抜いた爲めに、古靱の喧嘩場は失敗として、津の四段目は捨ひ物、土佐の熱演も嬉しく、三巨頭掛合の茶屋場など、九段目があつては實現疑しい、そして今回實現せねば末永久聞かれぬわけである。要するに番組としては不完全だが、出來榮としては上々吉、久しぶりに緊張した文樂を聞いた。又道行までとにかく抜かずにやつたのが緊張を助けてゐる、九段目が出てはさうは行くまい。尤もこれは諸太夫熱演の賜で、松竹の手柄ではない。熱演は何物をも吹飛ばす、嗚呼熱演なるかな。

▼ 藤 田 司 朝

小生は別段意見無之候。

▼ 平 野 ろ 昇

目下旅行中不在にて何れ共申上兼候。

▼ 清 水 清 司

目下病氣の爲休み居り候に付右御承知下度候。

忠九上演賛成芳名 (順不同)

伊 紺 菊 吉 鈴 小 山 久 藤 安 大 寶 保 岡 田 渡 宮 松 太
 藤 池 川 木 坂 口 保 田 藤 用 藏 々 々 口 會 本 岡 田
 松 我 秋 浪 松 美 玉 德 西 く 嘉 天 長 辰 っ 武 語 清
 猿 笑 月 補 寶 郎 造 郎 湖 ろ 津 昇 平 郎 壽 ぼ 藏 一 松 藏

平 瀧 及 飛 乃 濱 高 井 小 松 國 片 岩 中 大 高 鈴 武 白
 井 脇 川 石 村 口 島 田 林 本 井 山 田 野 品 木 笠 井
 壽 っ な 乃 秋 一 菊 和 朝 丸 ば 未 吳 一 兒 宏 清
 樂 ば 旭 め 菊 華 廣 泉 舟 章 都 め 成 羽 葵 重 雀 亮 華

北 永 吉 清 柳 松 中 猪 鈴 錦 日 石 平 木 岡 原 島 横 平 杉 井 秀
 村 江 田 水 林 島 谷 木 野 川 井 村 さ 崎 田 田 井 田 山 上 秀
 三 雄 登 彌 有 福 山 銀 一 錦 靜 華 か 田 越 天 三 平 語
 葵 治 盛 生 明 笑 鳥 水 朝 松 波 笑 榮 え 六 巴 賞 由 和 樂 巽 峰

萩 佐 堀 加 稻 湯 武 田 勝 吉 杉 青 田 霜 川 浮 小 野 阿 沼 西 淺
 原 橋 と 藤 垣 淺 藤 米 田 田 本 木 島 島 奈 谷 川 口 井 田 田
 玉 九 き 三 三 光 壽 井 米 地 政 大 集 錦 部 祖 都 な 盛 可 奇
 五 段 わ 郎 五 玉 昇 壽 雨 句 一 和 樂 司 司 樂 山 と 一 鶴 松 聲

青高金小清宮塚箕井嵐井大森菊米和清青野木淺鈴
 山野森 水 口浦上 坂澤 池岡田水木 下原木
 鹽 崎 司た二市 錦花春二精 呂朝和
 和清玉 鬼 清其和 つ四 柳和樂一潮壽正勇
 曉遊聲潮外操雀甫風光子喜菊志柳和樂一潮壽正勇

只池宮福坂三村井城島南笹笠田奧上白秋萩久吉高
 石田島島本口田上 戸田條本原林 田井本原保本橋
 美 綾壽竹里南 上井ば和喜一都
 義美和行中松玉龜登 光始鳳海沖誠孝り子鶴糸雀
 澄尙紅信治藤寶鶴里登光始鳳海沖誠孝り子鶴糸雀

川鈴中佐高藤野梶須富野須高蜂梁林土落小長水須桑乃
 口木野野田田崎山藤岡田 川久巢 屋合川島野賀原村
 政利 川和 文淑喜喜圭一吉素
 初其錦美春三龜義米生高 治三 壽 鏡人昇國子鳳藏弘
 音芳勢昇帆壽鶴秀司昇尾郎郎聲柳聲鏡人昇國子鳳藏弘

星吉歸河佐小坂氏荒佐田藤笠淺金中米富岡中水山高
 野田山原藤島本田 久中田松井井 澤 田戸中橋
 歸田 木間 仙清其松蝶仙ら 雲 五部花宮
 桔卯世幸 勇隆要久 太 郎吉晶蝶花玉五井司兜口壽仙古
 梗平花治七平藏吉泉郎吉晶蝶花玉五井司兜口壽仙古

ラチオ 浄曲漫評 金王丸

文樂中繼

〔五月十二日〕

桂川連理柵

帯屋の段

竹本土佐太夫

絃 野澤吉兵衛

今度愈よ文樂の庵看板を退いて、餘生を後進の指導に捧げるといふ土佐はんが、五月文樂座に、花々しく引退の披露目をした、そのだし物がこの『帯屋』である。引退に當つて、土佐はんは『止り木を降り立つ土佐の尾長鶏若葉の中を曉の聲』といふ一首を詠じたといふ。

當年七十五歳の御老體、殊に前年重患に罹つた土佐はん、その元氣を恢復して、現に放送もこれで二度目に當り、當夜、打ち聴く所によれば、前回——昨年の重の井子別れ——よりは、寧ろしつかりとした出來榮は嬉しかつた。例の半音に鼻へ

かゝる聲は相變らずではあるが……。どこといふてをろかはない。殊に『私も女のはしぢやもの、大事な男を人の花……』の、お絹のさはりなど、正に一品、更らに、お絹が奥にはいり、隣りのお半が出て來る僅かの地合など、何といふても、枯れ切つて、到低何人も眞似の出來ぬ妙味を味はせてくれた。又更らに、段切り近く、長右衛門がお半の書置きを讀上げる所も、頗る結構、斯ういふ處に此人の勝れた鍛へられた腕があるとおもつた。吉兵衛はんの絃も、無論上々である。

文樂故老

〔五月十六日〕

近頃河原の達引

堀川猿廻しの段

竹本鍛太夫

絃 豊澤新左衛門

ツレ彈 豊澤新太郎

文樂でも、所謂三巨頭の次に据る鍛太夫が、堀川を語る、尤も猿廻しだから、聴く人にとつては、名手新左衛門の絃をアテである。『同じ都も世につれて……』の頃から、先つ地唄の鳥邊山を聴かせた。『あのおもしろさを……』の前の合の手など、正に聴きものであつた。鍛さんは、どうも我等には苦が手である。どうも聞き苦しくて困る。何を申せ、あの美音を持ちながら、金襴の三段目でも語るやうな頓狂といふか、突びやうしも無い大聲を出して、時々脅かされるには弱る。お鶴が歸つて行く處など、大きなかたき役でも引込む按配に聴えるのであつた。嘗て妹脊山の段で、雛鳥の美しくかつた鍛さんを想ひ出して、殊に近頃はどうした事かと思はれるのである。鳥邊山がすんで、直ぐに興次郎の歸る處もウンと飛ばして、——これは無論時間の關係ではあるが——傳兵衛の出になるのであつた。『戸口をあくればはアしり入る……』と、これは、近頃『はアしりゆく……』と語る人が多く、我等はそれが賛成であ

る。人形を見れば判る、はしりゆくやつを與次郎が追かけて、内へ引き入れる、そして『妹を無理に、四人が……』になるのである。こんな事は或はどうでもよいのかもしれないが、ちよつと氣がついたので、書いておく。猿廻しの絃は結構、ツレ弾の新太郎君も段々上達されるのである。

大阪女義

〔五月廿三日晝〕

菅原傳授手習鑑

寺子屋の段

竹 本 春 駒
豊 澤 仙 平

前に一二度は、放送で何がつた筈ではあるが、どうも覺えがない。根が東京の人で、名人春子太夫に就て學び、初看板は茅場町の宮松だつたといふ古い人。その後、本場の上方住む、今では吉兵衛師に就て稽古をしてゐるとやら、源藏戻りもしつかりしてゐるし、ちよまよ〜の呼出しの終りで、おしまいといふアツケない時間の切り詰め、絃の仙平さんはお馴染の、確かな撥搦きはいふまでもない。

淡路人形

〔五月二十九日〕

双葉の楠

久子の方教訓の段

絃 鶴 澤 町 太 郎
豊 竹 上 總 太 夫

文樂の名家といふ古き山緒ある淡路人形藝術復興協會が、報知講堂に三日間公演を有つた時、その一座の呼物と稱する新曲『双葉の楠』が放送された。歌詞は小笠原長生子節、節は、楠公の末孫であるといふ竹本叶太夫が付けたものである。この人形の頭が上等なもので、名工苦心の作といふ實傳も、淨瑠璃の放送には、何の關係もないが、さてこの上總太夫といふのは、座付のタテ語りであるらしいけれど、聲の調子が、如何にも耳慣れず、節廻しもやゝ説經節が多く、我等にはどうも批評の氣分が出ず、かなり困り物であつた。絃の町太郎といふ人は中々鮮やかな撥搦きで、音もよく鳴つてゐた。

チヨボ語

〔六月九日〕

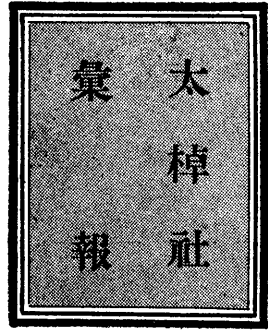
巖太夫記白石噺

揚屋の段

絃 豊 澤 巖 太 夫
豊 竹 巖 太 夫

巖太夫といへば、かなり古い松竹のチヨボ語りである。その有名なのは、さう

申すもいかゞなれど、お淨瑠璃の巧いので有名なのでは無く、時々問題を起して、イヤ、さうではない。三面六臂、あらゆる藝界に活躍するので、有名になつた人、時々、口や筆がすべつて、松竹の井上さんあたりから、叱られるのが、新聞の演藝面に現はれて有名であり、近頃は又、日本帝都義太夫因會理事長——長ですぞ——といふ怖いみたような肩書で押廻し、更らに、義太夫小唄とか、義太夫舞踊とかと案出？して、花柳界などに流行らせる奮闘で、斯界に貢献してゐるので有名である人である。さてその巖さんが、久し振りのラヂオ放送であつて、新吉原揚屋の段と来た。お芝居の床でちよい〜用ゐられる語り物だから、悪からう筈はない。が、又た、義太夫として決して……チヨボの人だから、詞の方は……それも御當人得意かも知れぬが、當夜つた處によれば、姉の宮城野が、餘りにも重々しく、片はづしのお局の如く、妹の信夫も、もう少し、だだアがアま、の心持ちを語つて貰はなければ、アノ人形が動けない、と笑ひながら聴いた事であつた。地合は可もなく不可もなし、といふ處。金丸どうも賞め過ぎるとの評判に、こゝ少々口から出まかせの悪口、御免候へ〜。



待望久しき最高權威

第廿七回 東都五十義會開かる

永い歴史と輝かしき山緒を持つて、本邦最高權威たる東都五十義會春季大會は、六月二十五日より三日間異常な興奮と割れるやうな盛況裡に華々しく丸ノ内報知講堂に於いてその第廿七回の幕を開いた。

待望久しき同會なれば、今回は出演者も多數にわたり、最初の發表の他に一日餘計に日數を増し、出演者は各自十八番物をひつさげて苦心精進の程を示して熱

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。

▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。

▽特種の催ほしの外前置きを略します。

—記者—

演また力演、聴衆また嗚りを鎮めての謹聽に大當りを以て幕を閉じた。

今回は錦上更に花を添える意味に於て相談役、會員に依る掛合六番、幹事三氏に依る序開き三番を、それ／＼三日間に分けての上演も聴衆を喜ばせ、將に至れり盡くせりの稀に見る盛會であつた。

これは常務理事吉田三芳、細川清兩氏の涙ぐましき奮闘と、相談役、幹事諸氏の打つて一丸と爲した苦心奮闘が報はれ

たわけで、出演諸氏の熱演も亦充分精進の跡を示して見事なる成績をおさめ、審査員星野桔梗、吉田三芳、長谷川文久、安藤光樂四氏の異常なる努力も亦充分感謝されねばなるまい。

審査成績表は次の通りであるが、それに生き立ち特別上演の番組を記載すれば次の通りであつた。

(初日——廿五日) 十種香(無審査幹事、都昇、都太夫) 本下(若狭之助、清華。本藏、桔梗。三千歳姫、操。番左衛門、國聲。下部、松鶴。絃、道之助。琴、紋三郎) 野崎村(久作、武市。お光、美峰。お染、可遊。久松、千鶴。母親、三芳。およし、松鶴。絃、猿之助。ツレ、猿藏、猿三郎、松四郎)

(二日目——廿六日) 油屋(無審査幹事、壽瓢、綾秀) 逆櫓(松右衛門、素鶴。權四郎、松鶴。お筆、長平。およし、隅斗。又六、三芳。富藏、桔梗。九郎作、光樂。絃、猿三郎) 太十(光秀、國。十次郎、松實。初菊、清華。操、可遊。皐月、松鶴。久吉、國聲。絃、寛三郎)

(三日目——廿七日) 忠六(無審査幹事、がん昇、猿藏) 鯨屋(權太、國聲。彌左衛門、がん昇。お里、千鶴。母親、光樂。彌助、關路。内侍、松雨。村役人、松鶴。梶原、清。絃、猿之助) 一力茶屋(由良之助、桔梗。九太夫、呂聲。重太郎、がん昇。彌五郎、紅司。おかる、關路。喜多八、美昇。力彌、都昇。伴内、三幸。平右衛門、松鶴。絃、猿藏)

一七、七五 操 一四、〇 巽
 一六、五 潮 一四、五 素聲
 一六、五 隅斗 一四、五 鳴門
 一四、七五 紅司 一四、〇 玉寶
 一四、七五 生駒 一四、五 二樂
 一四、二五 盛鶴 一四、〇 春樂
 一五、五 呂聲 一四、五 糸樂
 一五、二五 吾樂 一四、五 龜鶴
 一五、〇 清 一三、五 錦松
 一五、二五 美昇 一三、五 清雀
 一五、二五 京樂 一三、五 柳汀
 一四、七五 高尾 一三、五 貴昇
 一四、二五 三司 一四、七五 しろは
 一四、二五 筑波 一三、五 要

京濱素義聯盟 創立記念 義太夫大會

京濱素義聯盟が結成された事は前號詳報の通りであるが、その創立記念として豪華な義太夫大會が、六月十日より四日間大井の鎮西閣に華々しく開催された。四日間の番組は左の通り。

初日 日吉(龍糸、力彌) 油屋(關路、宿屋(ひさ司、駒登太夫) 伊賀五(古清、雷糸) 寺子屋(一幸、重之助) 辨上(濱司、雷糸) 合邦(美義、團蝶) 安達(三栞、猿藏) 陣屋(十三三、語勇) 宿屋(お光、清調) 戀十(薰、雷糸) 沼

錦司 一四、七五 文玉 二四、五 幸生 一〇八、五
 愛松 一三、七五 金鳳 二一、五 清昌 一〇七、五 三車
 司 一三、五 司重 二〇、五 鶴三 一〇六、五 さかむ
 廣陽 一三、二五 愛玉 二〇、七五 都山 一〇一、七五 紅陽
 美義 一三、〇 美福 二〇、〇 北晴
 朝章 一八、七五 喜鶴
 瓢六 一八、〇 一鶴
 丸都 二五、五 松藤 四等(錦松) 五等(愛玉) 六等(朝章)

入賞

津(柳光、清調) 先代(かなめ、仙君) 又助(東司、重之助) 岸姫(高尾、駒登太夫) 紙治(光玉、清調)
 二日目 鳴戸(千島、力彌) 山名屋(其芳、力彌) 阿漕(遠波、力彌) 廿四孝(不二樂、丈之助) 合邦(北晴、雷糸) 陣屋(さ章、稻吉) 新口(敬子、雷糸) 先代(文玉、駒登太夫) 鮮屋(胡蝶、雷糸) 柳(美幸、稻吉) 美濃屋(波朝、朝見太夫) 本下(壽聲、蟻三郎) 鮮屋(東光、絃平) 辨慶(一竹、朝見太夫) 瀧(喜吉、稻吉)

市若(龜鶴、駒登太夫)未定(美昇、猿平)

三日目 森(龍糸、力彌)新吉原(龜鶴、力彌)鮎屋(越司、雷糸)安達(さかゐ、團蝶)忠六(米本、新造)八陣(一鶴、駒登太夫)新口(鈴代、清調)先代(八千代、絃平)安達(幸生、雷糸)辨慶(清子、雷糸)赤垣(井孝、昌子)日吉(可笑、昇登)合邦(サ樂、雷糸)赤垣(淑人、昇登)忠四(吳羽、米翁)岸姫(呂聲、駒登太夫)寺子屋(壽樂、朝見太夫)四日目 夕顔柵(千島、力彌)忠六(東光、力彌)廿四孝(稻子、稻吉)忠三(雅章、駒登太夫)合邦(清邦、昇登)紙治(清昌、重子)安達(愛松、駒登太夫)太十(昇、昇登)合邦(富貴、重子)忠四(甲、重之助)菅四(團壽、猿昇)壺坂(古清、團造)新口(他笑、鹿重)陳屋

(昔昇、駒登太夫)玉三(浪花、猿昇)竹の間(其芳、重之助)太十(關路、雷糸)の間に開催。

綾 秀 會

山田壽瓢氏不斷の努力にて、綾秀會の發展は日さましく、六月は左の通り開催された。

六月七日(駒形俱樂部)玉三(綾路)先代(治光)柳(綾登)合邦與(壽光)酒屋(呂壽)陳屋(龍司)油屋(壽瓢)六月十三日(喜久本、勝治身振劇入)十種香(彌樂)忠三(司光)毛谷村(龍司)油屋(壽瓢)同十四日(同上)朝顔(綾登)太十(司光)組打(龍司)安達(壽瓢)

六月十九日(武藏野俱樂部、同身振劇入)小磯(歌吉)辨慶(彌樂)太十(司光)揚屋(龍司)安達(壽瓢)同廿日(同上)忠三(司光)壺坂(綾登)沼津(龍司)野崎(壽瓢)以上絃(竹本綾秀)

會堂に開催。

戀十(越巴)安達(かなめ)忠六(三昇)太十(奇聲)修善寺(素鳳)河庄(金扇)合邦(美登利)寺子屋(國聲)

二十二日 忠六(素鳳)太十(三昇)陳屋(錦松)紙治(玉五)宿屋(清華)鯉谷(たもつ)長局(越巴)鮎屋(國聲)絃(豐澤廣助)補助(鶴澤辰六)

聲 友 會

第一百十三回を六月廿二日午後六時より小石川俱樂部に開催。

酒屋(みやこ、美之助)宿屋(語松、米翁)阿漕(金鳳、道之助)太十(吳羽、猿三郎)沼津(とをる、紋左衛門、ツレ紋三郎)

淨曲無名會

六月二十八日午後四時より丸ノ内電氣俱樂部に開催。

玉三(がん昇、猿藏)朝顔(國聲、猿三郎)酒屋(たもつ、辰六)新口(美峰、

本欄の前書きにもあります通り、番組御送附、又は御通信なきものゝ掲載もれは、何卒御用捨を願ひます。

記者

松 葉 會

六月廿一、廿二日午後五時より麻布公

猿之助)逆槽(和樂、猿藏)堀川(猿之助、ツレ松四郎)

東京古靴會

同會は神田區花房町三番地に事務所を置き、河野國聲氏奮闘の現れは、今回東上明治座に於ける組見壹千餘名に達し、その盛んなる應援振りは各方面より驚嘆されたのだが、同會は今回七寶入金屬製會員章に古靴大夫の近影五種を添えて會員に頒布した、なほ次回から毎回寫眞特輯を添付し、十回以上の來會者には美裝アルバムを贈呈する由である。

關樂翁氏

關義好と言へば、その昔有名なものであつたが、老後は樂翁と稱して時折此道に親しんでゐられた關氏は、今春淋しく黄泉の客となられたが、六月十日午后三時よりほんの内輪の人々に依てしめやかな追善義大夫會が淀橋俱樂部に於て催ほ

された。何分内輪だけで急に催ほされた事とて、故人の多くの關係者は餘り顔が見えなかつたが、いづれこれ等關係者に依て、一周忌には盛大な追善義大夫大會が開催される事であらう。當日の番組は左の通り。

初手向(和孝) 回向(僧侶) 忠三(席主、和孝) 同裏門(幸昇、和孝) 玉三(嫩、和孝) 佐太村(宮古、和孝) 酒屋福笑、相生駒) 小磯(素弘、梁之助) 十種香(ゆたか、和孝) 岸姫(勢尾、和孝) 組打(芦雪、好造) 身賣(玉華、和孝) 寺子屋(二三樂、蝶子) 此外花柳、染昇の兩氏未定。

吉田可悅氏

追善義大夫大會

六月廿六日午後一時より、横井三山氏主催のもとに可悅氏追善義大夫會が淺草並木俱樂部に開催されたが、恰も當日は丸の内報知講堂に東都五十義會の春季大會開催中にも拘らず聴衆は立錐の餘地もなく大盛會を極めた。

當日は浪花浪六氏の手向草佐太村を始め、三蝶、菊花、鈴代、光樂、菊扇、初枝、永樂、新華、美光、藤花、三壽、吳洲、三秀、麓、光玉、錦志、文久、旭、菊壽、猿玉、綾波氏等多數贊助出演の外大切に阪東勝治一座の身振劇入にて、横井三由氏は十種香を語り、(絃綱之助、ツレ清三、琴小和光) 浪六氏は武田勝頼に紛して身振劇に出演、非常な好評を博した。

竹本彌國大夫後援

義太夫會

竹本彌國大夫上京三年を祝し、記念義太夫大會を六月廿日正午より淺草公園俱樂部に開催した。

志度寺(龜鶴)組打(照子) 八陣(有明) 酒屋(秀玉) 菅四(花光) 岸姫(佳笑) 先代(さつき) 鳴戸(孔雀) 新口(力) 赤垣(榮) 生駒山(文司) 太十(松玉) 沼津(春和)

淺草音女會 (第四十七回)

技藝監督に竹本津賀太夫、竹本米太夫、後援として竹本土佐太夫、豊澤松太郎を推戴する東京花柳界唯一の義太夫團體、淺草音女會は相談役平井榮、長谷川文久の兩氏を始め、幹事恵比壽家富之助、日

の家八重吉の努力よろしきを得て圓滿に繼續、開催の都度多くの應援者押すな

の満員の盛況を極めてゐるが、第四十七回を六月廿日午后四時より、同會の本城淺草公園俱樂部に開催、文字通り立錐の餘地なき盛會であつた。

鈴ヶ森(富千代、富之助)掛合(十種香)勝頼(幸三)濡衣(竹松)八重垣姫(小つな)糸(富之助)酒屋(かきつ、志磨吉)掛合(野崎)久作(かきつ)久松(八重吉)お染(竹松)後家(富千代)おみつ(喜代葉)糸(富之助、ツレ志磨吉)鳴戸(八重吉、志磨吉)寺子屋(富之助、富千代)竹本津賀太夫作曲、掛合(淺草觀音靈現記)うば(かきつ)稚兒(富千

女義東會

六月廿日午后一時より第卅五回を東橋亭に開催。

玉三(巴松、福光)揚屋(津賀重、駒照)小磯(巴龍、駒照)十種香(巴駒、巴住)朝顔(彌照、駒清)陣屋(梁登、巴住)酒屋前(播摩年、駒登久)同奥(昇登、仙君)寺子屋(駒龍、津賀昇)鳴戸(小津賀、紋教)合邦前(團雀、清二)同奥(彌周、三生)御所三(猿春、猿女)掛合(阿古屋)重忠(播摩年)岩永(駒龍)榛澤(彌周)阿古屋(小津賀)糸(三生)ツレ(紋教)三曲(松四郎)

豊澤廣助中心の

義太夫座談會

名古屋義太夫聯盟主催の豊澤廣助師を中心とする座談會は、六月廿五日午后七時より、名古屋新聞社會議室に於て開催されたが、大岩市長始め愛好家五十餘名出席、同師の講演に極めて意義ある一夜を更かした。

大 大日本素人淨瑠璃會

同會の第廿回春期大會は前號既報の如く、五月廿七日より三日間堀江演舞場に

民 事 事	刑 事	商 事	特許事件	迅速懇切 に取扱ふ
辯護士 法學士				
飛石久太郎				
併號 かなめ				
<small>東栄市牛込區東五軒町五四 市電東五軒町停留場南 電話牛込0574七番</small>				

開催されたが、審査の結果採點は左の通りである。

一八一、〇	櫛	一四三、三	榮四
一七五、八	信濃	一四四、〇	旭暉
一七五、三	金聲	一四〇、七	初音
一七四、五	生樂	一四〇、〇	幸遊
一七三、三	小若	一四〇、〇	永寶
一七二、二	出雲	一三七、二	小富士
一七〇、五	孝調	一五五、八	ゆしべ
一六九、二	和十	一五五、〇	虎勢
一六七、三	重司	一三三、六	志ほう
一六〇、三	里卜	一三六、八	和玉
一五九、五	義鳥	一三六、〇	やまと
一五七、七	登一	一三六、八	眞勝
一五五、二	梅光	一三五、〇	壽玉
一五五、八	泉笑	一三三、三	華峯
一五四、七	米正	一三三、八	麒麟
一五四、五	貴鳥	一三三、三	東升
一五四、二	貴道	一三〇、八	春好
一四九、三	紫幸	一三〇、八	やかぎ
一四九、〇	鶴峯	一二九、二	可昇
一四八、七	むさし	一二九、〇	ゑて津

一八七	芳玉	一〇五、八	琴城	九六、〇	華松	六六、〇	二斗
一六三	白水	一〇四、八	千昇	六六、〇	美のる	七五、二	千年
一五八	轟	一〇四、八	錦玉	四四、五	芳調	七五、〇	卯山
一三三	里昇	一〇三、三	集樂	八八、二	一瓢	七三、〇	大笑
一〇八	惠若	一〇三、三	小里昇	六四、四	千隅	七〇、四	金平
一〇三	喜友	一〇一、〇	豊	七六、二	一呂	七〇、二	まつみ
一〇〇	吟青	一〇一、三	花昇	優一等(小富士)	優二等(ゑて津)	優三	
一九七	アリオ	一〇〇、三	勇昇	等(アリオ)	衰狀(信濃)	衰狀(可昇)	
一〇八	勢月	九六、〇	重枝	衰狀(幸遊)			

大阪文樂座七月興行

朝顔日記 舟別れ 阿曾次郎(富太夫、千駒太夫) 深雪(辰太夫、播路太夫) 宮大夫、相瀬太夫(叶太郎、團伊三) 宿屋(相生太夫、道八)(呂太夫、吉左、翠市) 大井川(源太夫、寛市、喜代之助) 道行(和泉太夫、長尾太夫、相生太夫、呂太夫、隅榮太夫、駒若太夫、松島太夫、土佐榮太夫) 友造、八造、友太郎、清若、友三郎、清友、重次郎) 人形 阿曾次郎(玉幸) 深雪(紋十郎) 岩代(玉市) 徳右衛門(玉徳) 下女(文之助) 關助(光之助) 伊賀越道中双六 沼津(駒太夫、清二七) 藏人(文作)

三十三間堂棟由來 平太郎住家(伊達太夫、重造) 人形 お柳(文五郎) 平太郎(政龜) 緑丸(紋司) 平太郎母(玉七) 藏人(文作)

郎、ツレ鶴太郎、友駒、胡弓吉藏) 人形 重兵衛(榮三) 安兵衛(玉徳) 平作(玉次郎) およね(文五郎) 孫八(榮三郎) 菅原傳授手習鑑 寺小屋(相生太夫、道八) 呂太夫、友工門) 人形 源三(榮三) 戸浪(小兵吉) 菅秀才(紋昇) 小太郎(文枝) よだれくり(玉昇) 玄蕃(門造) 松王(玉藏) 千代(紋十郎) 御臺、(紋太郎)

◆ 誌 上 舌 三 寸 ◆

本欄は第一に喜び事、次に怒る事（これは人身攻撃に亘らぬ程度）など、皆様の御投稿を大に歓迎致します。つまり照魔鏡のやうなもので、善玉悪玉が映し出されるのであります。

誌上は匿名でも住所氏名は必ず御書添えを願ひます。

太 倅 社

高座と立の早變り

何とかといふ先生、近頃各紙に盛んに女義の評判を書き立て、おいてになる。さだめて女義連も名譽と心得、敬意を表してゐる事だらう。僕も敬意を表して先生の記事には餘り眼を通さぬのであるが、六月十五日発行の淨瑠璃時報の『淨曲ポスト』にフツ眼を落した處、先生の第七回佳照會を聴くの御高評が載つてゐる。仲々おほめ上手で、その上、綾千代も猿玉もニコチン中毒とやら、ご商賣もお上手。商賣なれやこそ斯うも評せるものと敬服したが、大切『千本道行』で竹本佳照と市川佳照を同人物とお思召し、高座と立と二役の早變りを期待して居たとのお言葉に、出来

得べき事でない早變りまで御期待遊ばす先生の御造詣、はてさて、どこまで深いのかほとゞ敬服の外はない。（七 餓 兒）

語り時間に就て

東寶小劇場で貴社主催の東都素義名流大會の際に、富取氏が種々説得してゐられたにも拘らず、竹内とをる氏は語り時間卅分以内の規約を破つて一時間近くも語られました、これは差支ない事ですか、又はかういふ場合、とをる氏は倍額の會費を納められましたか。

（本所・杉本生）

答

杉本氏にお答ひ致します。あの時は私も随分困りました。とをる氏は前に缺演者があつたから、二人分語つても時間には差支ないと言はれますので、それでは切にまはつて一段語つて下さいと頼みましたが、切は御免だ、番組通りこゝで語るが、前の缺演者の分を伸ばすのだから、時間には變りはないと聞き入れずに高座へ上がられたのです。後が見えなないので穴になるから繼いでいたゞきたいといふ場合は、時間の規定は規定でも、穴をあけて聴衆に迷惑をかけるより語り繼ぐといふ事

は差支ないと思ひますが、しかも、此時には後の語り手が二人も揃つて見えてゐる事ですから、前の穴を自分で語り埋めるといふ事はどういふものでせう。後の語る方々が幸ひに眞の素義として恥じない温厚な人々でありましたので、何んの苦情もありませんでしたが、主催者の苦勞は缺演者のみならず、かゝる時間の事までに心痛する時があります。

例へば切の人の上り時間があまり遅くなりさうな場合は、前の人は長々語りたい事は山々でも、そこをはしよつて次へ早く渡したところ、何も損得に關はることもなく、早い終演は實は聴衆にも喜ばれ、さうしてこそ仁義の道であり、これぞ義太夫道徳といふのではないでせうか。

會費は別に倍額は頂戴致しません。なほ竹内氏は御親切に『會費をもつと安くして時々やるがいゝ』と言つて下さいましたので、今度の催しには算盤と首つ引きで、一つ名案を練る事に致しませう。それでも、帝國ホテルと使用料の同値の東寶で、拾貳圓の會費は安いと云つて下さる方々が多数ありますので、氣をよくしてゐる次第です。（富取生）

當座帳

▽國井都平氏 丸都と改名。

▽円六會 六月の円六會は十六日午後六時より九段下『田六』にて開催した。

▽細川清氏 改築落成。

▽豊澤芳太郎連 七月四日平塚へ、豊澤兵吉連應援。

▽國森龍玉氏 鳴門と改名。

▽錦錦松氏 店舗改築中。

▼竹澤龍造一座 大好評を以て京城を引上げた一座は、六月廿日迄山口縣久賀町久賀座に開演、七月一日より姫路市甲陽座、同十一日より仙臺市歌舞伎座、同廿日函館市吉野演藝場、八月一日より同巴座、同十六日より廿一日迄同函館劇場に開演と決定。

▼豊竹宮太夫 同師の養母は竹本綱巴津と言つて俗に薬研堀の師匠で通り、竹本津賀太夫と兄弟弟子であるが、同女の墓碑は淺草榮久町の嚴念寺にあるので、宮太夫は明治座最終日の廿日師匠の古親太夫と參詣をした。

▼豊竹和國太夫 慶應病院へ入院。

▼竹本時之助 永々病氣の處、去る十三日午後九時五十五分永眠。

◆◆◆編輯後記◆◆◆

★やがて梅雨もあがり、一日毎に暑さが加はる時が参りました。

★六月は文樂座の東上、おまけに文樂には珍しい四日間の日延べ、これが終つてほつと一息入れる間もなく五十義會の春季大會、何んと忙しい事でありました。

★文樂も太夫、三味線、人形總動員の上、土佐太夫引退、吉兵衛引退、寛次郎襲名等々はさる事乍ら、いつもの年より一月早い好季節に恵まれて、連日大入滿員は目出度い事でありました。が、果然日延べ興行六の替りて、東都素義界の怒りを受けるに至つた事は遺憾の極みであります。

★東都素義界に於ける有志を始め各團體の怒りは、次に東上する文樂に如何に響くか。罪なき太夫、三味線、或は人形の人々こそ同情に堪えない次第です。

★即ち『忠九不上演問題』であります、本社は今回全紙をあげて文樂研究特輯號と致し

ました。

★本社の質問に對し研究家の諸先生、並に素義界諸彦の玉稿をいただきました事を深謝致します。

★松竹が贈り物に對して地割代を取るとか、又は料金が高過ぎるといふ事も書き添えられた方がありましたが、これは今回の問題に關した事ではなく、これ等の掲載は控えました。

★文樂座では兎角病人が續出するといふので、小泉蛙鳴氏は『文樂と健康』といふ一文を本號に寄稿される筈でしたが、病院の方が忙しくて果されませんでした。多分次號には間に合ふ事でありませう。

★本號は記事輻輳の爲め、近江清華氏の『わが隨感錄』櫻木俊晃氏の『小土佐物語』は休載致しました、筆者の兩氏に御諒承をお願い申上ります。

★次に本號は本誌發行以來未曾有の大増頁で、内容も頗る豊富、そこで本號に限りなどと定價も引上げたい處ですが、一番我慢をして『ほう、立派な特輯號だ』と、皆様から讃辯をいたゞく事を儲けといふ事に致します。

★大變延刊致しましたが、引續き七月號の編輯に取りかゝります。—— 芳河士 ——

後本誌名譽會員

(イロハ順)

(東京之部)
 高島一廣氏
 廣瀬いろは氏
 岡崎田六氏
 吉川浪補氏
 平野ろ昇氏
 阿部一氏
 平田和氏
 中澤平巴氏
 竹内とる氏
 安藤どろ氏
 吉田登盛氏
 小川都山氏
 安藤都山氏
 保々都昇氏
 栗原千鶴氏

神馬里芳氏
 本木大熊氏
 鈴木和樂氏
 小林和舟氏
 本多可笑氏
 大和田可笑氏
 飛石かぬめ氏
 加藤なめ氏
 高橋可兜氏
 西田可遊氏
 勝川勝川氏
 紺川勝川氏
 竹内もつ笑氏
 松尾たもつ笑氏
 大田嘉武市氏
 田口嘉武市氏
 上田大辰壽氏
 井上龍巽氏

金井辰稻氏
 乃村弘氏
 坂倉素遊氏
 浮谷祖樂氏
 片山つばめ氏
 宮本武藏氏
 萩原うづぼ氏
 乃村乃菊氏
 高野昇氏
 中野羽氏
 石川華笑氏
 清水彌生氏
 國井丸都氏
 松林福笑氏
 鈴木兒雀氏
 水戸部壽氏
 原田越壽氏
 河野巴氏
 松岡國語氏

寶藏寺天昇氏
 鳥田天賞氏
 大築葵氏
 松本朝章氏
 及川朝旭氏
 柳川有明氏
 寺岡三幸氏
 木村さかえ氏
 平井かえ氏
 問宮さくら氏
 細川くみ氏
 金田金鳳氏
 井田金泉氏
 錦田錦松氏
 淺田奇聲氏
 歸山歸世氏
 川奈部銀花氏
 猪谷銀司氏
 岩木義水氏
 岩田雀水氏
 高瀬成氏
 高瀬末操氏

沼日湯近白松桑高武濱田秀山平菊玉鈴吉北岡野橫吉
 井野原江井岡原品笠口口 田井地井木田村田口井田
 盛靜清清清里美一宏秋司秀壽壽秋松松三三 な三
 鶴波司華華雄峰重亮華重峯瓢樂月樂寶芳葵源と由
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

(地方之部)

米國平野一昇氏
 同武榮玉氏
 同杉山陶岳氏
 同兼廣廣玉氏
 同西本西紫氏

樺太宮下杉鳳氏
 橫濱霜島錦司氏
 同田島集樂氏

名譽會員

吉田三芳氏

今回本誌後援名譽會員を御快諾賜り難有奉深謝候

太棹社

定部金三十錢 郵税三錢
 六月分金一圓八十錢 郵税共
 一年分金三圓 郵税共
 廣告料 普通一頁 金貳拾圓
 特別一頁 金參拾圓

第八拾七號

(行發日五廿回一月毎)

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます
 ▼誌代は總て前金御拂込の事
 ▼なる可く振替に御送金の事
 ▼郵券代用は一割増但三錢切手の事

昭和十二年六月廿七日印刷納本
 昭和十二年六月卅日發行
 東京市小石川區音羽二丁目二四

編輯兼發行人 富取壽鹿
 東京市牛込區早稻田町五八

印刷人 栗原榮松
 東京市牛込區早稻田町五八

印刷所 栗原印刷所
 電話牛込一四五一番

東京市小石川區音羽二丁目二四
 發行所 太棹社

振替東京三一七八五番

諸印刷物引受

皆様のおすゝめに従へまして、弊社に諸印刷物をお引受けする事に致しました。

大小、多少に關はらず何卒御下命の程を偏にお願ひ申上ます。

牛込一四五一番（太棹の印刷所）へお電話を戴きますか、又は弊社へおハガキを賜りますれば、直ちに參上仕り、極めて廉價に、迅速に、出來得る限りの御便宜を計ります。

太 棹 社

醫療用治療界の寵兒!!

於各大博覽會
賜優良國產金盃賞牌多數



本木注射針

併號本木大熊

於東洋に於ける
斯界のパイロット!!

製品種目

齒療用	醫療用
ニ 十 八 ケ ル 製	超 不 酸 化 鋼 製
白 金 製	引 拔 鋼 化 鐵 製
英 國 製	最 優 鋼 製

東京市瀧野川區中里四四七
本木注射針製作所
所主 本木梅治郎
電話水石川(85)二四三七番
電話水石川(85)五二〇九番
出張所 東京市本郷春木町二ノ五
電話水石川(85)三四一〇番
研究所 千葉縣君津郡富岡村田川

昭和十二年六月廿八日印刷納本
昭和十二年六月廿八日發行
行(每月一回廿五日發行)

太 棹 (第八拾七號)

定價 金參拾錢